馬　駆ける

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
馬　駆ける

【Ｎコード】
Ｎ４３２７Ｚ

【作者名】
しらせ

【あらすじ】
受験に失敗し進路を絶たれたカケリ、そんな彼女の前に現れたのは若草区の新人区長マケンドー。敗北者に選択の余地はなし。マケンドーがカケリを欲したその理由とは…？裸足で駆ける馬となれ！恋とトラブルとレースがノンストップなラブコメディ◆サイトで連載中のものと同じ内容です。２０１０／６／６　～連載、第十四話まで掲載中。

第一話　敗北、そこから始まる物語

敗北…、それは悔しき二文字。人生においてできることなら味わいたくない、それが敗北。
様々な敗北がこの世にはあることだろう。個人にもよるが。勝負事だったり、夢だったり、恋だったり、大きなことから些細な事まで、敗北、できることなら…経験したくないものだ。
彼女、マドウ・カケリ十五歳もまた、人生の敗北者となってしまった。
進学をかけての受験と言う名の戦争に、おもいっきり負けたのだ。人生、しかし失敗から立ち直れる、這い上がれることだって不可能じゃない。あきらめることも嘆く事も、けして悔しいだけで終るわけじゃない。
が、…彼女カケリは両親と賭けをしていたのだ。受験と言う進路をかけて、それは彼女の自由をかけての一世一代の勝負であった。…わけだが。

「うっぐわーーーー、なんたることだーーー」
不合格の悲痛な三文字。ああもう終った、あたしの人生ここで試合終了した。うぐわーーー。
うち、マドウ家は自慢じゃないが豊かではない家だ。しかも両親が揃いも揃って亡者がつくほどの守銭奴だったりする。唯一の子供である、いわば宝でしょ？宝。たった一人の娘だよ！多感なお年頃だよ！そいでもっていろいろ夢見たり憧れたり、人生これからが楽しくなるって言う、そんな年頃だよ？
一年前の進路相談の時に、あたしは迷わず進学希望だったわけ。さすがに天下の国立学校なんぞむりだけど、若草区立の高等学校には通いたい。将来の為、なんていうと夢をしっかり持っている子だっ

て思われそうだけど、…実のところ夢に憧れるレベルっ子だったりして。…そこをね、ついてきたわけよ、うちの親は。
「ふーん、あんたさー、学校出て？なに？しっかりとなにをしたいか決めてもいないんだろ？」
「ううう」
「だいたい、勉強もスポーツだってなにかに秀でているわけでもなし。我が子ながら、…ねぇ、早いうちにけじめつけたほうがいいと思うんだよ」
「ななな、なんですと？」
酷いでしょ？　我が子にはなんの才能もないんだと、お前の人生あきらめろとですよ？信じられます？おまけに…。
「ふー、…子育てがここまで金のかかる事とは思わなかったけど、しょーがないよね、生まれた以上は」
はい？　なんだこの最低な親たちは。
しかも真顔でいってるから、おそろしい。いやおそろしいもなにも、あたしも慣れているんだよね。だって長年ともに暮らしてきた親子なんだもの。うん、一にも二にも金金金の守銭奴なんだー。
そんなあたしにとって、子供は宝物です（キラキラ。なんて他の子の親がとんでもない存在に思えてならなかった。思ったところでうちはうちで、どうしようもない守銭奴だ。
「なあカケリ、お前なんか金になることしろよな。進学なんて、そんな金はうちには余ってないんだから」
ためいきまじりにめんどくさそうに、この親どもはおっしゃりました。
「お前金にならない？」と。

さすがにあたしもキレました。
あたしはなんのために生まれたか？　この守銭奴どもの金になるためじゃない！　きっとなにか、なにかあたしにしかできない大きな使命があって生まれてきたんだ。それをなすためにも、進学させて

いただきますと！
「ふーん、…いうねー、ならさ。とりあえず受験は許してやろう。ただし、本命の一校のみな」
「うううう、本当！？」
「できるかどうか怪しいが、お前が受かるくらい力があるのなら、それは金になる才能がもしかしたらあるかもしれないってことだからな」
金か…。
「わかった。絶対に受かってみせる。その時はあたしも覚悟を決めるから！　約束は守ってよ！」
「おしおしわかった。お前もダメだった時は、覚悟を決めて金になれよ」
半目の抑揚のない声の父にあたしは宣言した。合格決めて、自由を手にしてみせると。

そして一年後の春。…桜…散りました。
……。
「ぷっ…、言ったとおりになったろ」
「ねぇー」
……畜生の声がする。くすんくすん。あたしの…自由は…絶たれてしまった。これでいいのか？　人生、たしかに負けっぱなしだったけど、一度くらい勝ちがあったっていいじゃないかーー！

ピンポーン
……。
ピンポーン
「ちょっと、お客さん来てるんじゃないの？」
下の階にいる守銭奴両親に呼びかけるが。

「あーもーめんどくさいなぁ…。どうせ押し売りじゃないのか？
めんどくせーなぁ」
「ねぇいい加減にして欲しいわぁ。うちには一円たりとも出す金なんてないっていうのにねー」
押し売りかどうかもわからないってのに。
ピンポーン
まだ押してるよ。…あーもーしょーがないなー。
たく、自室に引きこもって落ち込む時間くらい、そのくらいの自由くらい許してよ。
「はいはい今開けますー」
玄関の扉を引きあけると、そこに立っていたのは…誰？このイケメン。
「（カッコイイ…）」
「！…君は」
！？　何か驚いてる？　あ、あたしヘンな格好でもしている…かな？　Tシャツにジャージって普通だよね？
「…えっと、どちらさま？」
「ああ失礼をした。私は先日この若草区の区長に就任したカクバヤシ・マケンドーという者だが、ご両親はいらっしゃるだろうか？」
「区長…さん？「あらーーー、区長さんじゃありませんのーーー」
「あだっっ」
さっきまで横になってブサイク顔していた母が、いつのまにかあたしを押しのけて、区長を出迎えていた。
今の人が区長かー、…あんな人だったっけ？若草の区長って？　あたし受験でしばらくテレビとか見てなかったし、世間の事には疎いな、受験で忙しかったし…、やばい泣けるぜ。
区長さん変わったばかりみたいだね。…にしてもずいぶん若い感じだな。イケメンだし。…母め、年甲斐もなく目をキラキラさせちゃって。父も、相手が区長だからってにやにやへこへこ…はいお金と権力には絶対服従ってのがうちの親なんです。

「今日はどうされたんですか？　就任のご挨拶なら、この前にされましたよね？」
お茶を出しながらの母の声。高いよ、いつもよりキーが高い。…なんかこっちが恥ずかしいわ。
部屋に戻りかけたあたしを、その区長が声で引き止める。
「実は…今日はマドウさんにお願いがあってまいりました。誠に勝手なお願いになり恐縮なのですが…」
な、なんだろう？　まさか、お金の援助とかじゃないでしょうね？我が家でお金の援助などNGぶっちぎりもいいとこなんですよ新人区長さん！
「あのー、区長さんもしかして、先日おっしゃられてたことですよね？」
ん？すでに話し合いがあったこと？
「はい、あのお話のほうはすでになされて？」
「ええ！　そのことでしたらすでに解決済みですので。ぜひともお願いします！」
うわっすっごい嬉しそうな母の声。こんな声色の時って、お金が…入るときだよ！？ん？
「うちのカケリでしたら、どうぞ、お好きにしてやってください！　あれになんの力があるかわかりかねますが、区長さんがおっしゃるのなら、問題ないでしょう。というか、お金になるなら、もううちはええどんとこいですからーーはっはっはーー」
ち、父ーー！？　今なんとなんといった？
「ちょっとまったーーー！　なに？なんの話？　あたしのこと話してなかった？好きにしていいとか？　どういうこと？」
「なにも聞いてなかったのか？」
「だ、だからなんの話？！」
「今さら言い訳などするなよカケリ。お前約束したじゃないか。…言う事聞くって」
「……はーーー？　だから、なんの」

「文句なんて言える立場じゃないでしょ。あんたは負け犬なんだから。そんなあんたをね、区長さんがもらってくださるってことなのよ」
「へ？もらうってなにそれえーーー？！」
「マドウさん、誤解のないようにもう一度言いますが…。私はカケリさんの才能を伸ばしたくお預かりさせていただくという話で」
「ちょっと待て区長！　才能ってなんだ？　あたしは自慢じゃないが、才能なんて皆無の負け犬なんだぞ」
「あらやだ自分で負け犬って言っちゃった、ぷぷっ」
「笑うな！キッ」
「…そうか、君は気づいていないのか」
ん？　今区長にやりって笑わなかったか？　なんかぞくっとしたんだけど、気のせい？
しかしなんだ才能って。おかしいだろ、親もちったー疑えよ。詐欺だ、これなんとか詐欺ってやつだよ。区長だからって安心しちゃだめだろー。
しかし、この親、もうだめだ聞く耳なんて持たない。すごい気持ち悪いくらい満面の笑顔なんだもの。一体いくら掴まされたんだーー？
「カケリ、観念して、区長さんのもとに行きなさい。どうせ他にいくあてなんてないんだし」
「そうそうこんなステキな区長さんがもらってくださるなんて、もう断るほうがバカってもんでしょうが」
「そういうわけだ。ご両親の許可もいただけたし、君には私の元に来てもらおう」
え、え、ええええーーー？！
笑顔で、満面の笑顔で手を振る守銭奴両親に見送られて、あたしは区長に連れていかれたのだった。そのままの格好で。
「お待ちしておりました。マケンドー様カケリ様」

うちの側に止まっていた車のドライバーさんがあたしたちを丁寧な動作で出迎えた。ん？もしやこの人区長の関係者か。と探るまでもなく、隣の区長が紹介してくれた。
「俺の秘書をしている」
「カツと申します。お見知りおきを」
「は、はい。マドウ・カケリです。お世話になります」
カツさん、も若い感じだ。二十代前半ってところかなー。見た目もカッコイイし、それに優しそうなお兄さん。はっ、なに和みかけてるんだあたし！
車に揺られる事約二十分、到着したのは…、なにここ豪邸ーーー？！
「カクバヤシ家の別邸だ。今は俺の私宅として使っている。今日からお前はここに住む事になる」
「こんな豪邸に住めるなんて、夢みたい。…じゃなくって、一体あたしはなにをさせられるんですか？！」
いくら区長だからって、この展開は、警戒心抱かないほうがおかしいっつーの。
「マケンドー様、まだお話にはなられて？」
「説明は後でかまわんだろう。先に市長へ報告に行かんとな」
「ちょっと説明しろよっ！」
「すぐに市長のもとに向かう。カツ準備をすませるぞ」
「はい、マケンドー様」
「こらっ無視するな！」
「あいにくだが俺は多忙な身でな。一から十までお前の面倒は見られん」
見てくれとか頼んだ覚えもない！
「詳しい説明はあとでしてやる。とりあえず、お前が世話になる者への紹介だけ先に済ませる」
くそぉ、なんなんだ？この男。さっきから態度とか口調とか偉そうになってないか。なってるよな確実に。

下流家庭生まれには、とんと縁がなかったはずの、豪邸へとやってきました。突撃！区長の豪邸訪問！
中に入るとどっかの高級ホテルばりの広いロビー。噴水の一つや二つあってもおかしくないぞ、ないけど。出迎える使用人にも圧倒される。ここはもう一企業だなー。
区長は奥の間へと消えていった。カツさんが使用人の人になにか指示して区長のあとについていった。取り残されたあたしのほうへと、やってきたのは女の子の使用人。
「今日からあなたのお世話をまかされたメイドのヒヨコといいます」
業務的な物言いがちょっと気になったけど。
「あ、はい、お世話になりますマドウ・カケリといいます」
「はー、部屋こっちなんで、ついてきてもらえます？」
「は、はい」
やっぱりなんか気になる態度だ。
「はいここよ。とっとと入ったら？」
半目だし、声が低くなったし、やっぱり感じ悪くない？この人。
くっただでさえ、親の勝手でいきなり連れてこられて気分悪いってのに、こんな対応されるとますます気分悪いわ。
「あのですね…」
「あなた調子に乗らないでよ。自分が、マケンドー様に選ばれた特別な女の子だなんて、思い上がってたりしないわよね？勘違いはやめなさいよ！」
いきなり人差し指ビシィッと突きつけられて…？はぁ？
「はぁ？　だれが調子にのってなんか」
「いい、いくらマケンドー様が超絶ステキだからといって、勝手に恋するのは禁止しているから、このマケンドー様ファンクラブ会長のヒヨコを通してからじゃないと！」
…はぁ左様ですか…。
「あのそんなことより」

「そんなことですって？！　ファンクラブが非公認のものだからっていちゃもんつける気？この小娘がっ」
あんまり年違わなさそうな人に小娘呼ばわりされたぞ。
「だからあたしにとってはどうでもいいことなんだって。それよりも、ヒヨコさんでしたっけ？　あたしなんで区長に連れてこられたんですか？」
「は？　アンタ何も知らないで来たわけ？」
「うん。両親にだまされたというか、わけがわからないうちに…」
「……」
「一体、なにさせられるんですか？　ここで働かされるんですか？」
「……」
「ちょっと、なんで答えないんだー？！」
軽くぶちきれるあたしに対して
「知らないし」
「え、ええっと知らないって？」
聞き返す。
「知らんわーーー、お前こそなんなんじゃーーー？！」
「ぎぇーーー」
「私はね、今日ここにマケンドー様が女子を一人連れてくる、その者の面倒を見てやってくれという指示しか受けてないのよ！　知るわけないわむしろこっちが聞きたいんじゃぼけがーーー」
この人ちょっと危ない人か…、ああやだ。
「そんなに知りたきゃ、直接マケンドー様かカツ様にお聞きすればいいんじゃないの？　でもねこれだけは確実に言えるわ。アンタはマケンドー様の恋人にはなれないってね！」
もうなんか、めっちゃ帰りたい。

カケリたちが住んでいるここ【若草(わかくさ)区】は青原(あおはら)市の中心あたりに位

置する。若草区他二十の区からなる青原市は、この国の西部にある。市とは…国を成す自治都市のことだ。そして市は、多数の区によって成り立っている。国の統治にありながら、市はそれぞれの特色を色濃く持っている。青原市もそうだ。二百年以上も続いているある文化、それは青原市に限定したとても閉鎖的な文化の一つであったが、その文化は青原市に生きる各区民にとって、生活を左右すると言っても過言ではない、重要な意味を持つ文化だった。

現在の青原市長を務めるコヒガシ・ゴン五十三歳は、その文化を深く愛し、推し進めている。白いスーツに、派手な柄の赤地のネクタイ、ちょび髭に、ラメの入った派手に光る蛍光色のメガネ。市長というよりは、まるでメディア映えしそうな文化人といった風貌だ。

青原市の形を簡単に説明すると、定型ノートの角っこを丸めたような形になる。小さな湖は北部に点在し、主要な河川は三つあり、その三つは南部の海へと流れ出ている。青原市の南部は海に面している。

市の心臓部である青原市庁（あおはらしのちょう）は、ほぼ市の中心…、中央東区と中央西区に挟まれる形である。若草区から見れば北東にある。若草区から車で二十分から三十分ほどの距離になる。市庁はどの区にも属さない。市庁内に主要な施設は揃い、市庁に並列してドーム型のイベント施設が存在感を抑えることなく立っている。

若草区長マケンドーは、ここ市庁へときた。市長へのあることの報告を兼ねての訪庁だ。

マケンドーを迎え入れる青原市長、市長とマケンドーは古くからのなじみでもあった。

「やあやあ待っていたよマケンドー君。今日はひょっとしたら、嬉しい報告の予感だねぇ」

「市長、今日無事手に入れることができました」

「そうか、ずいぶんと自信があるみたいじゃないか、これは期待していいという事かな？　だがあと一月ほどで、間に合うんだろうか

？」
「間に合わせます。私は不可能は口にしません、市長」
挑戦的な鋭いマケンドーの目に、市長もまた油断できない鋭い目で返してくる。
「楽しみにしているよマケンドー君。君のデビュー戦に注目しているからね、ホント…今期のレースは最高に盛り上がってほしいものだね」
嬉しそうに市長は笑った。

マケンドーのもとに連れてこられたカケリは一体どうなってしまうのか？
マケンドー、そして市長はなにを企むのか？
レースとは一体なんなのか？！
第二話へと続く。

第二話　マケンドー、嫌な奴

若草区長マケンドー宅へとつれてこられて一日が経った。その間、あたしのお世話をしてくれるっていうメイドのヒヨコさんが、いろいろと教えてくれた。
マケンドー様のかっこよさ伝説について、とか、マケンドー様とその右腕カツ様の素晴らしすぎる絆物語だの、カクバヤシ家のすごさとか…、まあいろいろというか主に区長のマケンドーについてだった。
ヒヨコさんはよっぽど区長にお熱らしい。…たしかにイケメンだけどさ、どうもちょっとあたしは不信感を抱いてしまっている。まあ悪いのはうちの守銭奴両親なわけだけど。もっとちゃんとあたしに説明する義務ってあるんじゃない？いきなり連れてこられて、親は金金って目の色輝かせていたし、…売られたんだあたし間違いなく。なにさせられるんだろう？　もしかして、ここで住み込みで働かされるとか？　ヒヨコさんみたいなメイドとして？
…それならあたしなんてわざわざ連れてかなくても、他にいい働き手なんていくらでもいそうなものなのに。…やっぱりわからない。ヒヨコさんも知らないってすごい勢いでぶちきれるし。
…はーーー、なんかもうすごい、疲れてます。

「あのー、区長ってまだ帰ってないんだよね？」
「はあ？　何言ってんのあんたバカ？　マケンドー様は区長なのよ！　すっごく忙しいに決まっているじゃない！　アンタがクソして寝ている間に、どれだけ働かれているか想像もつかないでしょうけどね！」
いちいちけんか腰なのが腹立つけど、まともに反論していてもＨＰ削られるだけと昨日で十分わかったので、軽く流しつつ返事する。
「ですよねー、区長だし忙しいよねー」

「フン、ガッカリさんのようね。フフフ、アンタ、マケンドー様とラブラブドキドキな同棲ラブコメ展開期待していたんでしょうけど、おあいにく様、マケンドー様は超多忙なのよ！　ざーんねーんでしたーー」
どうしよう、もうすでにこの人の脳内透けて見えているあたしってエスパーかって。このやりとりにも疲れてきたよ、そろそろ区長かカツさん戻ってこないかな？
のタイミングで、あたしを呼ぶ声がした。
「！マケンドー様が帰られたわ！　さあそこのクズっこ、失礼のないようにお迎えするのよ！」
やっと、先に進めそうだよ…。

あたしを待っていたのは、区長とともにいる、浅黒い肌のいかにもアスリートって肉体のお兄さんだった。…見た感じ使用人さんにも見えないけど、何者か。訊ねる前にそのお兄さんが爽やかに挨拶してきた。
「やあ君がカケリ君だね？　僕は君のトレーナーをすることになるモリオカだ。モリモリ鍛えような」
キラーンと白い歯光らせて爽やかに笑うこのモリオカさんと、はぁ…と握手を交わしながら、あたしは区長へと視線を向ける。
「区長！　一体あたしはなにさせられるんだ？　ここで働かされるの？」
「話の前に確かめる事がある。ちょっとついて来い」
「は？　え、ちょっ」
話くらい、すぐにできることじゃないのか？
説明もなく区長はついて来いと命令した。くそっ、ちょいと苛立ちながらもあたしはついていくしかなかった。向かった先は邸内の中庭…というか軽いグラウンドだ。ちょっとサッカーくらい遊べそうな広さがある。さすが、金持ちの家は違うね！（嫌味たっぷりに）

あたしと区長とトレーナーのモリオカさんがそこに揃った。…確かめるって一体、なにを確かめるのだろうか？…なんか嫌な予感しかしない。
「脱げ」
「は？」
なんだ、今この区長なんて言った？　あたしの耳が聞き違えただけか？
「聞こえなかったのか？　今すぐ脱げ、その窮屈なものを」
「は、はぁ？　な、なんだと、そんなことできるわけ」
真顔でこの男なに言ってくれる？　脱げだと？　裸になれってこと？
冗談じゃない、そんな変態に付き合えるわけがない。くるりと向きを変え、逃げる！
が、そうはいかなかった。足を引っ掛けられ、その変態男に捕まる。
「ぎゃーーー、いやーーだーーはなせーー」
「ちっじたばたするな、大人しくしろ」
「いやーーー」
靴と靴下が、無惨に脱がされ素足にされた。
「よし、走ってみろ」
「く、うううう、え？なに？」
「二度聞きばかりするな、そのまま走れといった。全力で走ってみろ」
「ぎゃっ」
バシーンて、区長が地面を木刀で叩いた。お前そんな物騒なものでいたいけな女の子を脅すのか？こいつ、区長どころじゃないぞ、とんでもない男じゃないか！？
「うがーーー」
やけっぱちで走った後、とんでも野郎とモリオカさんが話し合っていた。どうもタイムを計っていたらしい。
一体、なんの実験？
「ふむ、タイムは悪くないが、鍛えなければ話にならないレベルで

すな」
「だろうな、…レースまで一月か、それまでにアレを使えるレベルにまで引き上げてくれ」
「ちょっちょっとなんの話？」
なに勝手にそこの二人だけで話を進めている。
びゅっと風切る音させて、木刀があたしの足元に向けられる。
「お前はモリオカ氏のトレーニングに励め。音を上げることは許さん、いいな」
威圧する目、この男、やっぱり…。わなわなと体が震えてくる。
「なっ何様のつもりだ！」
「マケンドー様だ」
くっ、こいつの本性やっぱり、とんでもない畜生野郎だ。
「反抗的な目だな。…無駄な足掻きでしかないぞ。お前には選択の自由などないのだからな」

それからあたしの地獄の日々が始まった。
早朝から、トレーニングルームでモリオカさんのトレーニングが始まる。筋トレ、走りこみ、呼吸法などなど。まともにスポーツやってこなかったあたしには、最初から体力がついていかなくて、もう疲労ハンパない。
まあでも、トレはキツイけど、それにはなんとか耐えられた。ただ…、時折様子を見に来るマケンドー。木刀もって鬼の形相で叱咤をかけるもんだから、たまったもんじゃない。ストレスだ。そんなこんなで、あたしがここへ連れてこられて一月が経った。

「一体…、あたしになにをさせるつもりだ」
「顔を上げろカケリ、明日がお前の晴れ舞台だ」
「へ…？」

「そして俺の晴れ舞台でもある」
「だから、なに？」
「レースだ」
「レースゥ？」
レース、ひらひらのほうじゃなくて、…あっちの意味の？
ただ俗的な表現で、それがどんなものなのか、ハッキリしない。なんなのレースって。晴れ舞台ってなに？
「今日はゆっくり休めて疲れを癒せ。わかったな」
背中を向けるマケンドー。待て、ちゃんと説明してから行け！
「ちゃんと説明してよ！なんだレースって？」
「お前は余計な事など考えなくていい。ただ明日は走りぬけばいい」
説明になどなってない。結局、あたしはわからないまま、寝床に向かった。
その途中で、カツさんがあたしに優しく言った。
「ご心配はいりません。マケンドー様は、カケリ様を悪いようにはいたしません。この私が保証します」
カツさんはいい人そうだから、あたしも信じたくなってしまう。まあこんな状況だし、人を疑ってばかりじゃ居心地悪くてやってられないよ。わかったと頷いて「でも説明は絶対にしてもらいますよ。あたしだって知る権利はあるはずです」
にこりと優しい笑顔でカツさんは頷いてくれた。マケンドーに伝えてくれるだろうか。

「お前は何も考えるな、ただゴールだけを目指せばいい」
区長マケンドーはそう言った。
今あたしは、市庁の敷地内にあるドーム施設の中にいた。
レース、それは…
「お前の足に若草区民の生活がかかっている」

「なんだとー」
市が行っているらしい、公な催し。青原市の伝統らしいのだが。各区が、馬と称する走者によって、レースを行っているのだとか。それってただのイベントじゃなかった。レースの勝敗によって、市の予算分けが決まるらしい。ようするに、上位にいけばいくほど、市から回される予算が増えるってことらしい。
それはつまり、若草区の各区民の生活にも影響するってこと？それって…
あたしの肩、じゃない足にみんなの生活がかかっていることなの？
「気負うな。考えるなと言っただろう」
「そんなこと聞かされて、考えないわけにいかんだろう」
プレッシャーだ、しかも、これがあたしの、そして若草区長マケンドーのデビュー戦。いやでも緊張するわ。
だからマケンドーは説明をしぶった？カツさんはマケンドーを信じろと言った。あたしは…
「走れ、それがお前の仕事だ。他の事に気は回させん。そのために俺がいるのだからな」
レースには走者だけじゃない。コース内には様々なトラップが仕掛けられているらしい。それを解除し、走者をサポートし、導くパートナーとのコンビによってレースを勝たなきゃいけない。
ただ走れと言った。どうせあたしに選択権なんてない。
靴を脱いで裸足になる。背を向けあったあたしとマケンドー、それぞれの場所へと向かう。

走者のゲートへと向かう。そこにはもう一人スタート準備をする人がいた。デカイ男の人だ。いかにも絵にかいたようなマッチョマン…、もしやこの人が？
「よっ、アンタがオレの対戦相手か？　オレの名はコーン・ジャイアントだ。小湖区代表になる。お互いデビュー戦になるわけだが、

まあ…アンタみたいな小娘相手とは、オレもついてるな」
なんだとそれは、簡単に勝てる相手とバカにしているのか？図体だけがでかくて速く走れるものか。
「おてやわらかにー」
愛想笑いで流して。燃える闘志を抱いてゲートの前につく。
負けられるか、こちとらあの鬼区長の仕打ちに耐えてきたんだ。こんなデカブツに負けられるわけない。
ゲート内の斜め上のスピーカーからアナウンスが聞こえてくる。
『皆様おまたせしました。本日の第一レース、小湖区と若草区の新人デビュー戦と相成りますー。我らが市長の目に止まるのはどちらの新人か！？　まもなくスタートとなります！』
アナウンスのあと、スタートへのカウントダウンが始まる。あたしも、対戦者のコーン・ジャイアントって人もスタートの位置に付く。
『――3…2…1、スタート！』
ゲートが開き、同時に駆け出す。ひらけた場所、歓声が降り注ぐ中、ただ己の前の進むべき道をひた走る。
スタートダッシュであたしが有利だったけど、すぐにジャイアントが横に並んだ。
「！？えっ」
目の前に突如落とし穴が現れる。行く先に黒いブラックホールが、つか止まれない。このまま走るしかない。
ダダダダ…。機械音が鳴り響いて。穴の上を渡れるように橋がかかった。
『若草トラップ解除成功ーー』
そっか、今のはマケンドーがトラップの解除に成功したんだ。そのままのスピードであたしは橋を駆け渡る。
『続いて小湖もトラップ解除だー』
すぐ後ろから追随してくる音が聞こえてくる。…とそんなことに気を配るより、あたしは目の前のことだけに集中するか。
ドーン！

すさまじい音と土煙が上がる。今度のトラップは、地面から伸び上がってきた巨大な壁。確実にぶつかるぞ。それでも、あたしの足はスピードを緩めない。
『若草第二のトラップも解除だー、速い、速いぞ若草ーー』
壁は前方へと音を立てて倒れていく。倒れていくその壁へと駆け上がって、進む。壁を越えたその先は、今度はぬかめり出した地面。
「（マケンドー！）」
心の中でアイツの名前を呼んで、あたしは突っ込んだ。あれ、ちょっ、まさか、間に合わない？
『ギリギリセーフ！　若草第三のトラップも解除だー！　さあ残すところトラップも次で最後だ！　このまま若草ぶっちぎりでゴールするのかー？！』
バシュッバシュッ
上空でなにかが放たれる音がしたけど、そのままあたしはゴールへと走る。
『おおっ、見事なタイミングだー！　若草最後のトラップも難なく解除だー。そしてゴーーール！』
ズシャッ
「いってて。…ふぅ」
ゴールと同時に滑り込んでいた。いたた。
やっと、あたしの足止まった。その数秒後に、自分のゴールと勝利のファンファーレを耳にしたのだった。
「勝った…」
会場のほうへと振り返ると。コースの途中で網にかかってじたばたしているコーン・ジャイアントがいた。
あれか、最後のトラップって…。
『本日の第一レース、デビューに勝利の花を咲かせたのは若草だー』
「よっしゃー」
ん？なんか反射的にガッツポーズとっちゃってた自分。

「お疲れ様です、カケリ様。見事な走りでした」
走者控え室へと向かう通路でカツさんがあたしを出迎えてくれて、タオルとドリンクを手渡してくれた。
「ありがとうカツさん、…マケンドー区長は…？」
「俺ならここだ」
カツカツと階段を降りてくる靴音。見上げると降りてきたのはマケンドーだ。どこにいたのかって？　トラップ解除者のみの別室にいたんだろう。そこにいる間は外との通信は禁止となるらしいから、カツさんとも連絡がとれないらしい。まあレースの間だけのことだけど。
「よくやったとはいわん。驕る者は真の勝者にはなれんからな。この程度で満足してもらっては困る」
この男は、カツさんとは正反対だな。
「今日がスタート地点だ。これから先はより高みを目指さぬことには、勝利はできんと思え」
「…なんだその言い方。いたいけな女の子が、若草のために走ったんだぞ？」
「勘違いするな。お前に区民への責任などない。責任は区長である俺がすべて背負う。軽々しく若草のためになど口走るな。責任とは立場ある身でなければ背負う資格はない。
お前はただ、なにも考えずに走ればいい、馬としてな」
マケンドー、マケンドー、やっぱりこいつはすっっごく嫌な奴だ。

「今日のレース楽しませてもらったよ、マケンドー君」
市庁内の市長の間にて、市長が声を弾ませる相手は、若草区長マケンドーだった。

笑いながらも、その目の奥には侮りがたい不気味な輝きがあった。
市長が見た目どおりの楽観主義者ではないことはマケンドーもよく知っている。
ハッキリと表に出さないが、互いにピリピリとした気を放つ。
わずかに目を細めて「ありがとうございます」とマケンドーは答える。
満足などしていない、それは互いにだった。たかがデビュー戦、籠手試しといったところだ。
「這い上がってみせますよ。市長、市が若草を軽視できぬほどに」
頂点をとると、マケンドーは誓った。
「たいした自信だねマケンドー君。しかし意外であったよ。君の馬、期待していたんだが、…まさかあの女の子だけなのかい？　君であればもっといい馬が用意できただろう？」
市長が納得してない一要素がそれだった。カケリレベルの馬、それで本当にこの先勝ち進んでいくつもりなのかと。素人目にも、カケリはすごい馬には見えなかった。
「市長、私の馬はアレだけです。期待はずれとおっしゃるなら、とことんその期待に背いてみせましょう。あの馬で頂点をとることで」
にやり、不敵にマケンドーは笑う。それに応えるように、市長もまたにまりと笑った。

馬がカケリでなくてはならない理由がマケンドーの中にはあった。
だが、それを公表する気は彼にはないだろう。もちろん当の本人であるカケリ自身にも。

第三話　君は、天使君

あたしがここへ連れてこられた理由がわかった。
それは先日のレースだ。あのレースで走らされる馬として、あたしは連れてこられたのだ。
あの親たちがレースのことを知っていたかどうかは疑わしいが、直前まで本人のあたしにすら隠していた区長マケンドーのことだから、親たちにも伏せていたんだろう。
子供がなにさせられるかということよりも、あの親たちは金が第一の守銭奴だから…、なんて言って悲しくなってきたぞあたしゃ。

「マケンドー様、本日のスケジュールですが――」
朝食をとりながらカツさんがマケンドーに今日のスケジュールを伝えている。どうやらこの後すぐに区議会らしい。あたしも同じ席で朝食をとる。
「カケリ、最近伸びが悪いと聞いているが、最初のレースに勝ったからといって気を抜くな」
厳しい眼差しと口調でマケンドーがあたしにそう言ってきた。
トレーナーのモリオカさんから聞いたんだろうか。たしかに伸びの悪さは指摘されたけど、しょうがないと思うんだけど。
「それがあたしの限界なんだよ。文句があるならもっといい人材でも探してきたほうが効率いいと思うんだけど」
「言い訳などするな。俺の馬はお前だけだ。他など考えん。だからこそ、絶対にお前にはもっと速い馬になってもらわねばな」
なにそれ、理由になってないだろ。だいたいなんであたしじゃなきゃだめなんだ？　もっと他にいい人材いるはずだろ、若草狭しといえど。…学生時代、あたしより足の速い人いっぱいいたし、あたしはスポーツでみんなから注目された事なんてほとんどなかったし。

心当たりがない。…となると、他になにかさせられるかもってこともあるのかもしれない。…マケンドー、コイツが外面だけの鬼畜野郎だってことはもうとっくにわかっているしね。
他にいくあてができたら、とっととこんなところ逃げ出してやりたいさ。
「くっ」
ムカツクこの男、朝食をほおばりながら、これでもかって睨みつける。マケンドーも鋭い目でにらみ返してくるからもうバチバチと火花ちってんじゃねーのと言わんばかりの精神バトルが。
「そーですねー。あたしの足には若草の命運がかかってるんですよねー」
「お前は俺の言ったことをまったく理解してないようだな。とんだ鶏頭か」
「なんだとーー?!」

「マケンドー様、カケリ様になにかご褒美でも提示されてはどうでしょうか?」
議会へと向かう途中、カツはマケンドーにそう提案した。カケリがレースに意欲的になるには、なにか理由が必要だろう。お金は両親の元に渡るわけだし、カケリ個人には、利益がほとんどない。…カクバヤシ別邸で食と住での不自由はないのだが。年頃で大人しいタイプとは真逆のカケリが言われるがままに従い続けるほうが、考えづらい。
「そうだな。アイツにもレースを勝ち抜くための目標が必要だな…」

「はいお疲れ。今日のトレーニングは終了だ。明日に備えてゆっくり休むんだぞ」
モリオカさんを見送って、あたしもトレーニングルームを出る。あモリオカさんは住みこみの人じゃないみたい。若草区に住んでいるみたいだけど。

あと一時間ほどで夕食だな。…一番楽しみなのがごはんの時間って、あたし終ってないか。まあいいや。

「困りますよ、ショーリン坊ちゃま」
「いいじゃん細かいなー。まだこうるさい人も帰ってないみたいだしさ。今のうちに、見ておきたいんだよね。どこ？どこにいるんだー」
なんか騒がしい声がしているな。…聞いたことない男の子の声だ。お客さんだろうか。まああたしには関係ないけど。
「あ、あれ？」
さっきの声がすぐ近くで聞こえた。目があった。男の子だ。スポーツ刈りの元気そうな感じの男の子。あの制服は、たしか国立中央大付属の…？
「ねぇもしかして君が噂の」
「へ？え？」
明らかにあたしのほうを見ながら近寄ってくる。
「兄上が囲っているっていう女の子。君のことだよね？間違いなく」
「な、ななな」
兄上？て誰のこと、まさか？
「へー、あの堅物の兄上に女の子なんて、想像もつかなかったけど、そうか、君みたいな子がタイプだったんだ」
な、なにかすごい誤解してない。
それもとんでもなくいやな誤解を……。
「かわいいね、兄上なんかにはもったいないよ。おれはショーリンっていうんだ。カクバヤシ家の三男で、中大府中の二年で拳法部の副主将やってんの。よろしくね。ねぇねぇ君はなにちゃん？」
なれなれしい、というか人懐っこいこだな。このショーリン君って。ん？カクバヤシってことは、アイツの弟？
…でも全然似てないな。
「カケリだよ。マドウ・カケリ。年も近いね」

なんか久々かも、年の近い人から、友好的な態度とられたのって。
当たり前だった事のありがたみをかみしめる今。
「カケリちゃんかー、名前もかわいいね」
見た目から名前までかわいいなんて褒められた事ろくにないんだけど、悪い気はしないなー。終始ニコニコ顔だし、褒め殺し、マケンドーとはここまで真逆とは。少しは見習えよマケンドー。
「そんなことないけど、ありがとう」
「ねぇねぇどっか遊びに行かない？　兄上なんかのとこにいてもさ、つまんないんじゃない？」
あれ？もしかしてショーリンくんはあたしの味方系？
「ショーリン様、困ります。マケンドー様が戻られるまでこちらでお待ちに」
執事長のカトウさんがショーリン君の態度に困った様子で頼んでいた。
「細かいなーカトウは。おれもカクバヤシの人間なんだし、別邸に自由に出入りしたってかまわないだろう」
「勝手なルールを作るな、ショーリン。ここの現家主は俺だ。俺の許しなくここに立ち入る事は認めていない」
「ゲッ、兄上」
「お帰りなさいませ、マケンドー様」
マケンドーがカツさんと一緒に帰ってきた。マケンドー、弟のショーリン君にも容赦なく厳しい口調なんだ。…というか。
「兄上がどう言おうが、ここの連中がおれを拒否することなんてできないんだからさ。好きにこさせてもらうよ」
「帰れ、そもそも若草区民でもないくせに、図々しい奴が」
ショーリン君とマケンドーの間にバチバチと火花みたいなのが散ってるように見えるんだけど。
なに？この二人って仲悪いの？　とてもよさそうには見えないけど。
「ほんと心が狭いよね、兄上はさ。長兄上と違って」
「お前の相手をしてやるほど俺はヒマじゃない。くだらん用しかな

いのなら帰ってもらう」
ドSオーラを放ちながら威嚇するマケンドーに、ショーリン君はひるむこともなく、挑発的な眼差しで肩をすくめながら後ろ向きにさがる。
「兄上おっかないし、出直すとするか。じゃーね、カケリちゃんまた会おうね」
「あっ」
すれ違い様にそう言い残して、ショーリン君は素早く正面口へと走っていった。
「ばいばーい」
嵐のように去っていった。
「フン、アイツは出入り禁止にしとけ」
「申し訳ございません、しかしマケンドー様」
カトウさんもなんか困ってるみたいだし、責めてやるなよマケンドー。マケンドーもそういうだけで、ショーリン君を絶対に拒めないみたいだし。いろいろあるのかな？カクバヤシ家ってのも。
「カケリ、アイツが何を言ってきても耳を貸すなよ」
「へ？　な、なんでよ？」
「なんでもだ。わかったな！」
またしても説明なんてなしで、超命令だこの鬼畜区長はっっ。
鼻息荒く部屋へと戻っていくマケンドー。ショーリン君のせいでアイツさらに不機嫌になったみたいだ。一体どんな関係なんだろう、マケンドーとショーリン君。
「カツさん」
カツさんに訊ねようとしたら、カツさんのほうから話しかけてくれた。あの二人の事について。
「さきほどの方はショーリン様、マケンドー様の六つ違いの弟君になります」
「兄弟でも全然違うよね。…ショーリン君は普通の人懐っこそうな男の子って感じだったけど」

普通と自分で言っておきながら、あの制服を思い出す。あの制服は青原隋一のエリート学校。カクバヤシの人間だって言うし、すっごいお金持ちで頭もよくって、すんごくエリートってことだから、あや普通ではないな。
そこは置いといて、中身だよ、人柄的なことね。
「ショーリン様は以前からマケンドー様につっかかってくるといいますか…」
「やっぱり仲悪いんですか？」
そう聞くと、カツさんは困ったように眉根を寄せた。
「ショーリン様は一番上のタイショウ様を尊敬されてまして、だからか、マケンドー様を認めたくないようなんです」
カクバヤシ・タイショウ…、どっかで聞いたような名前だな。…マケンドーたちのお兄さんってことか、まあ有名人なんだよね。
「いつか、ショーリン様の目に、マケンドー様の真のお姿が映ればと私は願っています」
真の姿って、ドSの姿？はもうショーリン君も知ってるみたいだし、どういう意味だろう？
「もちろんカケリ様、貴女にも」
…え？　どういうこと？　カツさん。

その日、いつものようにトレーニングルームでモリオカさんの到着を待ちながらストレッチしていた。
モリオカさん今日はおそいなぁ。五分前にそう思ってから、待ち続けて十分が過ぎていた。
トレーニングルームの戸が開く。モリオカさんかと思ったらそうじゃなくて、そこに立つのはヒヨコさんだった。不機嫌な顔をして、例のごとく腰に手を当てながらためいきをつく。
「よかったわねー。モリオカさん急用で来られなくなったんだって」
「ええっそうなの？　それじゃあ今日は」
「自主トレってことらしいわよ。いつも言われたとおりにやっとけ

ですって」
おおっそうなのかー。モリオカさんなにがあったのかとわかんないけど。自主トレとは、嬉しいかも。
「そういうわけだから、さぼるんじゃないわよ！」
ヒヨコさんそういい残して自分の仕事に戻ったみたい。シーンとなるトレーニングルーム。
自主トレか、…うひひ。
監視の目がない。自由の予感。
トレーニングルームからトイレに行くふりをして周囲を探る。みんなそれぞれの仕事をしているためか、あたしへの目は向かない。マケンドーも仕事に出かけている時間だし。トレーナーのモリオカさんも今日はいない。こんなチャンスめったにない。そう思ったら自然と足は、館の外へと向かっていた。

外に出て、道路を歩いていく。河川沿いに出て、河川敷を歩く。懐かしいなこのあたり、子供の頃からよく遊んだ場所。くるぶしほどまで伸びた草地の上、裸足でよく走った。うちの親は何度も言ってるようだけど守銭奴で、子供にも金をかけない主義だった。靴なんてすぐに買い換えなきゃいけないじゃない、子供の足の成長って早いし。きつくなってボロボロな靴を履くしかなくて。学校行く時は仕方なかったけど、学校帰りや遊ぶ時は、窮屈な靴を脱いで、ほとんど裸足で駆け回っていた。そんな経験からか、あたしは靴ってものが苦手で、裸足で走るのが好きなんだ。
靴を脱いで裸足になる。しゃりっとした草の触感が冷たくて心地良くて、やっぱりあたしは裸足でいるのが一番自然だ。
レースでも、裸足で走ったけど、そういえば…、なんでマケンドーはあたしに裸足で走らせたんだろ？　あたしが裸足が一番走りやすいって、親も知らない事なのにな。
そういえば何年前になるっけ、あたしがまだ小学生の低学年のころ、ここで走っていたときに男の子と出会った事があったんだっけ。…

あまりに昔過ぎて、どんな人だったとか、なにを話したのかはもうさっぱり覚えていないけど。今どこでなにをしてるんだろうなー。この若草のどこかで、暮らしているんだろうか。
「あれが初恋だったりしたのかなー？」
中学生ぐらいだったか、当時のあたしからしたらずいぶんなお兄さんだったわけで、あでもさっぱり忘れているあたり怪しいのだけどね。だけど、嬉しかった気持ちがあったように思うんだ。

『君の走っている姿に――』

あ、ワンフレーズだけ思い出した。でも肝心のところが霞がかったままだ。まあいいや、そんなこと。
遠い昔のキレイな思い出に浸っているだけじゃ生きていけない。

『お前は馬だ。馬としてレースに出て勝ち続けろ』

マケンドーの声の幻聴か。
草を蹴って走る。マケンドーめ！　あたしは、あたしはなんなんだー？！
アイツのためでも若草のためでもない。あたしは、なんのために走るのよ？
擦り切れたテープをむりやり再生しているみたいに、とぎれとぎれに写る映像。遠い日の記憶。君は一体、だれなの？
『君の走っている姿に――』
同じところを何度も繰り返して、進まなくて。
景色は次々に流れながら変わっていくのに。変わって…変わって？

「うわっ」
びっくりして、転倒しそうになりながら失速する。
「あぶない」

すぐ横から聞こえてきたその声の主に、抱きとめられてあたしは転倒を免れる。なにがあったかっていうと、それは…あああってちょっと待って、あたしも現状把握に少し時間が必要なんだ。
だって、だって、夢見たいな現実が今目の前に起こってて。あたしを抱きとめてくれたのは、キラキラ輝く絵に描いたような美少年なんだもの。
「ふう、あぶなかった。…だいじょうぶ？」
「ふわっ」
幻じゃなくて、あたしの目にはキラキラ効果が輝いて見えるんですが。
驚いたのは、誰かが併走しているのに気がついて、それがとんでもなく美少年だということに気づいてしまったからで。
その美少年に抱きとめられて、見つめられて、こんな状況で平常心保てるほどあたしはクールじゃなーい！
「だ、だいじょうぶ」
心配そうに覗き込む瞳を、安心させたくてついそう言ったけれど、あの表情をもう少し見ていたかったなんて気持ちもあったり。
「そう、よかった」
うきゃーーー
一変嬉しそうな、これまたとびきりのエンジェルスマイル！　キラキラ効果割り増しだよ。なにこの美少年はっっ。あたしは百回くらい萌え殺されたよたった今。
「驚いた。気がついたら隣走っていたから…」
「ごめんね、驚かせて。でも我慢できなかったんだ。すごく気持ちよさそうに走っていたから、一緒に走りたくなったんだ」
ぎゃーーー、なにそれ、愛の告白とやらですかーー？　いやーーー、悶え死んじゃうよあたし。
「よかった、ずっと、会いたいと思っていたから」
「え？　今なんて、どういうこと」
「ごらぁあああああーーーー」

土手の上のほうから響いてくる怒号は、見上げると鬼の形相のヒヨコさんだった、やべぇ見つかった。
ヒヨコさんが来る前に、彼に聞きたいことが。
「あ、あの、どういうこと、それより君は…」
「そろそろ戻らなきゃ、じゃあまた、ね。カケリ」
「…へ？」
くると背を向けて、エンジェルスマイルの美少年は風のように駆けて行った。
「ま、またねって…また会えるのかな？」
アレ、それよりあたしの名前、たしかにカケリって呼んだ。…どこかで会ったことあるっけ？　…あるわけないか、あんな美少年忘れるわけないし。一体、彼は何者なんだろう。天使のような笑顔の男の子、天使君…。

「カケリ話がある。食事がすんだら一階の処務室に来い」
その日の夜マケンドーに呼び出された。な、なんだろう、説教フラグか、そんな予感しかしてこない。
モリオカさんがいなかったからって、勝手に出かけたことを咎められるんだろうか。すでにヒヨコさんたちに叱られたけどさ。
「はぁーー」
重い溜息をつきながら、マケンドーが待つ部屋の戸を叩く。
「入れ」
無愛想なマケンドーの声がして、部屋の中へと入った。
椅子に腰掛けたマケンドーと向かい合う。デスクの上にはなにか書類があって、マケンドーがそれを手にする。
「あ、あのー」
言い訳を考えていたあたしの声を、マケンドーの声が掻き消す。書類をぱしっと軽くはたきながら、あたしのほうへ突き出す。
「カケリ、お前と俺で個人的な契約を交わそう」

「…へ？」
怒鳴られると思い込んでいたあたしの予想を、裏切られた。ん？
なんの話なんだろうか？
目をしばたかせるあたしの前に、もう一度マケンドーが書類をパシッとはたいて突き出す。ジロリとにらむので、めんどくさくもあたしはそれを受け取る。
「なにこれは」
上のほうにだけ軽く目を通して、あたしはデスクの前に腰掛けたままのマケンドーにと視線をやる。
「お前に走るための目標を与えてやろうと言っている」
「え？どういうこと」
「お前がレースで勝ち続けるためのモチベーションが必要だろう。カケリ、お前はお前の目的のために走ればいい」
あたしのために走れだと？
「お前の望みたった一つだけ叶えてやろう。ただし、今期のレースで優勝することが条件だ。
お前の望みはなんだ？　カケリ、言ってみろ」
あたしの望みだと？　本気なのか？　本気であたしの望みを叶えてくれるっていうの？　このドＳまっしぐらなマケンドーが？
「あたしの望みは…、自由になることだ」
くしゃっ、つい力の入った手で書類を握りつぶしてしまった。にやり、とマケンドーが不気味に笑う。
「わかった、受けてやろうその望み。お前はレースで走り優勝する。それを達成できれば、カケリ、お前を自由の身にしてやろう。それが俺とお前の個人的な契約だ」
「本当？　絶対だからね！」

二回目のレースが始まる。
通路をまっすぐに進めば、走者用のゲートに向かう。途中階段の前

で、マケンドーと別れる。
「カケリ、お前はお前のために走れ。それ以外のことは考えるな。ただ走ることに集中しろ、トラップは俺がすべて片付けてやる。いけ！」
階段を登っていくマケンドー、あたしはそのまま通路を進む。そして、二回目のレースに挑む。

今回の対戦相手は、二十代後半か三十代ぐらいかの、ひょろっとした浅黒い肌のやや出っ歯の男。向こうから先に声をかけてきた。
「よっ、オレが丸谷区の代表、キキタってんだ、よろしくなお嬢ちゃん」
「若草代表マドウ・カケリです。よろしくお願いします、負けませんけど」
「言うねー、こっちも女の子だからって手は抜かないぜ、まあ負けても恨んだりするなよ」
もうすぐ、あのゲートが開く。それの合図となるアナウンスが、スピーカーから流れてくる。
『皆様お待たせしました。本日の第一レースは、丸谷区と若草区と相成ります。デビュー戦を見事勝利で飾った若きエース若草区の活躍にご注目くださいませー。さあ、まもなくスタートとなります』
カウントダウンが始まる。
ゲートが開いて、眩い世界が映ると同時にスタートだ。

「――お疲れ様です、カケリ様。見事な走りでした」
「ありがとうカツさん」
レースも無事勝利で終了した。会場は、次のレースで盛り上がっているけど、あたしたちの戦いはひとまず終了だ。今回のレースも前回のようなトラップが次々に現れたけど、走りを乱されることなく、あたしは裸足で、全力で駆けられた。マケンドーのトラップの解除

は手際よく、一度もトラップにひっかかるような事はなかった。
「慢心するなよ。カケリ、帰ったらすぐにトレーニングの続きだ」
厳しい顔と口調でそう言うマケンドー。別にねぎらいの言葉をかけてくれなんて言わないけどさ。冷たい奴だよ、マケンドーは、ソレに比べてあの人は…。
河川沿いで出会った、まるで天使みたいな男の子、天使君。彼のことが脳内に浮かんだ。

第四話　ここが、必要とされる場所

『カケリ、カケリ、やっと会えた』
その声は、キラキラオーラは、君はあの時の、天使君?!
『ずっと会いたかった。カケリ、君はボクの運命の人だよ』
えええうそうそ、そんな夢みたいなこと言ってくれるなんて、えっ
ええっちょっ、近いよ天使君?
いやーーきゃーーー、そんな抱きしめるなんて、やだもう反則、や
だもう幸せすぎて死ねる。
やだなにこれ、あたしってば、なんかの少女漫画のヒロインだった
りするわけ?いや、こんな夢みたいなことあっていいの、あってい
いんだよ!
『好きだよ、…カケリ』
え、ちょっ、やっマジ?顔近いよ天使君、やっややや…

「んーーーー」
「とっとと起きんかごらぁあああああ!!!!!」
「あでっ」
バコーン
おでこに衝撃を受けて、あたしはでこを押さえる。あたしを見下ろすのは、週刊誌をくるりと丸めて手に持つ、鬼形相のヒヨコさん……。
「いったーい、もうちょっとふつーに起こしてよ」
「んだと?　たく気持ち悪い寝言あーーんど気持ち悪い寝顔見せたバツよ。そっちこそふつーに寝てなさいよ!」
はーーー、夢…か。夢と思えば納得してしまうの悲しいのだけど、抱きしめられてもぬくもりなんてなかったし、実感しているのはおでこの痛みくらいだ。ヒヨコさんに打たれたところの。
「つーか天使の夢とか見てたわけ?　マジキモイんですけど。ちょ

ーーキモイんじゃーーごらぁあああ」
「朝からそんなにキレないでよ、まったく。あ、ところでそれ、なんの本？」
あたしはヒヨコさんの手の週刊誌を指差した。あんなもの丸めて武器にするなっつーの。本は叩く物じゃなくて読むものでしょーが。
「フン、くっだらない三流ゴシップ誌よ。どこの有名人だろうが結婚しようが熱愛しようが離婚しようが興味ないんじゃごらぁあああーーー、あ離婚はざまぁって感じで悪くはないけどね」
文句言うってことはちゃっかりと中身読んでるんじゃないの？
「だいたいなんで、どこのマスゴミも私とマケンドー様のロマンスをスクープせんのんじゃー、ゴミクズどもがーー」
バシッ
「あでっ、ちょっなんで人の顔に本投げつけるのよ！痛いでしょーが」
「アンタも気になるようだし見ておいたらいいんじゃないの？どんだけ目を皿にしても、アンタとマケンドー様の熱愛スクープなんてどこにもないですからーー、ざーんねーんでしたーー」
「ったく」
ヒヨコさんのあのキャラにもすっかり慣れている自分が憎いわ。人に週刊誌投げつけて、とっとと自分の持ち場へと戻っていった。
にしても、こういう週刊誌も毎週ネタかかさないな。そう毎度都合よく、熱愛だの離婚だのないだろうに。あ、このトップ記事は、先日テレビで騒がれていた連続強盗事件の容疑者だっけ。学生時代だのなんだの、こんなことまで書かれているのか。まあ悪い奴は自業自得とも言えるけど。
なにげなしにパラパラとめくっていたあたしは、ある記事に目が留まった。写真の女の人、どこかで見たことあるような気がするけど、よく思い出せない、そんなレベルの有名人…、いや正しくはかつての有名人の記事だった。あの人は今？的なもので、すぐにあたしはページを閉じた。

「ほんとくだらない本だね、ヒヨコさんじゃないけど」
さて、ご飯食べて、トレーニングに向かわなくちゃ。

「カケリ様おはようございます。？額どうかされましたか？」
カツさんに言われてあたしはおでこを擦る。まだちょっと赤みがさしている。ヒヨコさんがすさまじい形相で睨んできたので、「なんでもないです。寝相悪かったのかな～？」と誤魔化した。
食堂に入るとすでにマケンドーが朝食をとっていた。
「カケリ」
いきなりマケンドーに呼ばれて、あたしはなぜかぎくりとなる。いちいち強めな口調で人を呼ぶなよ。威圧かこら。
「おはようマケンドー、なに？」
「カケリ様、とりあえずお席に」
「あ、ありがとうカツさん」
カツさんに席に座るように勧められて、まずはテーブルにとつく。チラリとまたマケンドーへと視線を向けると、朝から厳しい眼差しをあたしに向けていた。だからなに？トレーニングもちゃんとやってるよ。
「お前、あれからアイツと連絡などとったりしてないだろうな」
「へ、え？」
アイツって、だれ？　まさか、…まっさきに浮かんだ顔はあの人だ、天使君…。天使君のことマケンドーにばれていた？　ヒヨコさんは天使君のことちゃんと見てなかったみたいだし、知ってるわけないよ、うん。
「アイツ…ショーリンとは関わるな。アイツに誘われてもついていったりするな」
ん、…へ？
「ショーリン君のことだったの？」
「なんのことだと思ったんだ？」

「あ、ううん別に、て、なんでそんなことまで決められなきゃいけないのよ。ショーリン君悪い人とは思えないけど」
「俺はアイツのことだけを言ってるわけじゃない。カケリ、俺との契約を忘れたのか？」
「え、契約ってどういうこと？」
ギロン、とさらにマケンドーの目に殺気的なものが入ったので、あたしはびくりとなる。け、契約ってもしかして、先日の…、あたしとマケンドーの個人間での契約のことだろうか。
「約束したはずだ、条件を満たすまでは、お前の行動は制限されると。外部の者との接触も禁止していると」
「は？　なにそれ、そんな話は聞いてない！」
「なに？　契約書にちゃんと目を通さなかったのか」
う…ぎくり。
いくらなんでも厳しすぎやしないか、外部との交流も禁止だなんて、それじゃあ。
「それじゃあ友達と会ったり、話したりするのもダメってこと」
「当然だ。今さらダダをこねるなどしてもムダだからな。お前は契約書にサインをしたんだ。きちんと目を通さなかったお前に落ち度があるのだからな」
く、なんだと、そこまで自由がないのか？　あたしは。
「俺の馬でいる間はお前は公人だ。勝手な振る舞いをされて、若草に不利益をもたらされては困るからな。それに、外部からは悪意ある者に狙われる可能性もないとは言えんからな。一人で出歩くのも原則禁止だ。破るなよ」
悪意って、そりゃアンタに対して悪意抱いている人間ならいそうな気もしますけど。
「ん？　でもショーリン君は外部じゃないんじゃ？　同じ家の弟なのに？」
「アイツは若草の人間ではない、よって部外者だ」
そういうくくりなんだ。というか、単にマケンドーが感情でもって

ショーリン君を入れたがらないように思えるんだけど。
「非レース時でも気を抜くな。いつどこで見られているかわからんからな。カケリ、お前には少々緊迫感が足らんようだし、俺が時間のある時にでも、稽古をつけてやろうか？」
やだなにこの男朝飯食いながら木刀握るの？　ヤンキーなの？　ヘンタイなの？
全力でお断りしたいわ、嫌な予感しかしない。
「モリオカさんのほうがいいです」
きっぱりと言ってやった、さわやかスマイル意識して。

「今日のトレーニングはこれで終了だ、お疲れ様」
「今日もありがとうございました。モリオカさんお疲れ様です」
はーー、やっぱモリオカさんだわ。トレーナーがもしマケンドーだったら、木刀振り回す鬼畜トレーナーなんだろうな、…冗談じゃないや。
ふーー、疲れた。晩御飯まで部屋で筋肉ほぐしてくるかなー。

「あっ、やっほカケリちゃん、待ってたんだ」
ロビーの階段のてすりにもたれながら、あたしへと声をかけてきた男の子は。
「ショーリン君、なに？　あたしに用？」
にこにこ顔でショーリン君が近づく。そういやこないだ怒られていたけど、…いいのかなショーリン君ここに入ったりして。
「うん、今なら兄上いない時間帯だし、カケリちゃんに会うなら今かなと思ったんだ。ねぇ、カケリちゃん、遊びに行かない？」
「今から？　いやでも、マケンドーに怒られるんじゃ」
渋るあたしに、ショーリン君は「ええーー」と残念そうな表情で抗議する。
「酷いなぁ兄上、もしかして勝手に出歩くなって言われてる？」

「まさしくそのとおりだよ！　勝手に出るなとか、友達とも連絡取ったり会ったりしちゃだめだって」
「酷い、あんまりだ」
ショーリン君、あたしの現状に怒ってくれてる。やっぱりマケンドーよりも、ショーリン君のほうがあたしの良き理解者なのかも。
「そんなの守る必要なんてないよ、行こう」
「えっ？」
ガッと強引に手を掴まれて引かれて、ショーリン君に連れられるままあたしは邸外へと出た。い、いいのかなぁー…、親切にしてくれるカツさんの顔を思い出すと心がちくりと痛む。でも同時にマケンドーの顔も思い出したら、ムカッときてショーリン君のほうに行くべきって考えになっちゃう。

「今からだとどこが開いてるかなー。あ、カケリちゃんどこか希望ある？　映画見たいとかなんでも言って」
あたしの前を歩いていたショーリン君がくるりと振り返って尋ねてきた。今商店街近くの裏道を歩いている。
「うーん、急に言われてもでてこないなー。…いいよショーリン君に任せるよ」
「え？　いいの？　おれの好きなとこで。じゃあさ、カケリちゃんパラダイスとか興味ある？　若草B級観光スポットめぐりとかいっちゃう？」
「えなにそれおもしろそう」
「じゃ決まりっと。兄上だったら絶対にそんなとこ連れて行ってくれたりしないだろうね。というか、どこかに遊びに連れて行ってくれたりなんてないんだろうな、カケリちゃんかわいそう」
まあたしかに、マケンドーに連れて行ってもらったところなんて、…レースくらいだ…。
「クソつまんないでしょ、兄上。カケリちゃんさ、兄上のとこから

出たほうがいいんじゃない。兄上の所にいたって幸せになんてなれないよ」
ショーリン君、なんでそこまでマケンドーのこと…。
「なんでショーリン君マケンドーのことそこまで嫌ってるの？　たしかに、鬼畜で嫌な奴だけど、…一応兄弟なんでしょ？」
ぴたり…。一瞬ショーリン君の顔から表情が消える。シーンと静まる空気が、ちょっと…怖い？
「カケリちゃんは兄上の事どこまで知ってる？」
「へ？　マケンドーのこと…どこまで知ってるって…」
鬼畜なドSのくせに、外面だけはよくて、一にも二にも若草のってばかりで、区長で…。ああそういやあんまり知らないかも。アイツの本性だってあたしだけじゃなくて、カツさんやショーリン君だって知ってるわけだし。…別にアイツのこと深く知りたいなんて思わないけど…思わないけど。
でも、気にならないってことはない。ショーリン君との関係、ちょっと気になるかも。この二人、結構ていうか相当仲悪そうなんだもの。なにかあったとしか思えない。
「まあ兄上がわざわざ話すわけないか。きっと兄上自身も消し去りたい過去だろうしね」
ハッと息を吐きながらそう言うショーリン君の表情は冷たげだ。まるで嘲るような顔に声。ここまでショーリン君に嫌われるなんて、マケンドーの過去になにがあったというのだろう。
別に、アイツに興味なんてないけどっ。
「今ではあんなに偉そうにしているけどさ、兄上は…カクバヤシの出来損ない、恥ずべき存在なのさ」
「え？…」
その時、黒い風が吹いた。黒い…影？！
あたしがそれに気づくより数秒早くショーリン君が反応した。
「おれの背後をとろうなんて、百万年早い！！」
「ぐぅっ」

どすっという音と共に黒服の怪しげな男が崩れ落ちる。突然ショーリン君を背後から襲おうとした謎の男は、襲い掛かる前にショーリン君の素早い拳に落とされた。あざやか！
「すごい、ショーリン君！　てなにその人」
「見た見た？　おれ実戦でも強いんだよ。まあどこのだれかは、調べればすぐにわかるっしょ。それよりカケリちゃんが無事でなによりだよ」
得意げにパンパンと拳をたたきながらショーリン君があたしのほうへと振り返る。
「！？　ショーリン君まだ他にも」
いる、危険な影が。あたしが察知したより早く…、ショーリン君今度は今ので油断しきっていたからなのか、ううん、もしそうじゃなくても、一度に三人に襲われたら、反応も追いつかないよ。
「うぐっ」
「ショーリン君！？　うっ！？」
倒れこむショーリン君に伸ばした手は届かなくて、急に視界が遮られて、え、真暗や、なにこれ、目隠し？！
ショーリン君がやられた直後にあたしは背後から襲われた。目隠しされて拘束されて、担がれて、車のシートに下ろされて、え、ええっこれって、これって…。
「よし、出せ」
車が発進する音に感覚、何も見えなくて、しゃべることもできなくて、ヤバイ、意識が…遠ざかっていく。
あたし、拉致されたのか。

目隠しを外されて、やっと視界が明るくなったのは、どっかの部屋の中に連れて来られてからだ。
「こ、ここは」
どこ？と見渡す。…なんて広い部屋、マケンドーのとこに負けず劣

らず、裕福そうな部屋だ。テーブルから本棚やカーテン、インテリアや照明から様々なものが、そういう雰囲気を醸し出している。
「悪いが君にはしばらくここにいてもらう」
「は？　え、だれ？」
部屋の外、ドアのすぐ向こうから中年男らしい低い声がした。だ、誰の声かわからない、知らない人だ。
「ここはいったいどこですか？　あなただれ？　あたしになにをする気？」
ドアをドンドン叩いてあたしは叫んだ。だめだ、鍵が向こうからかけられている。この部屋に監禁されている？
どうして、どういうこと？　なんであたし拉致されて、監禁されているの？　なんなの今の声のおっさんは。
「いきなりの事で混乱しているだろうが、落ち着きたまえ。君に危害は加えたりしない。大人しくしていれば、ちゃんと帰してあげるつもりだ。そう、二日間、ここにいてくれればいいだけだ。もちろん食事は一日三食用意するし、室内には必要最低限のものも揃えてある」
一体、なんのつもりでこんなことを。…二日間ここにいろって？
二日間…、て、明日はレースの日じゃないか。
「ちょっと待って、困るんだけど！　こっちにだって都合ってものがあるんだけど！　明日は大事な用事が」
「若草区代表の馬」
！？
まさか、この人はあたしが若草代表の馬と知って。ということは、やっぱりレースの関係者？！
「明日のレース、君には不参加でいてもらおう」
「ちょっちょっと、なによそれ、なんなのよアンタ」
ドンドンガチャガチャ、ドアは固く閉ざされて、あたしの力では開けることができない。遠ざかる靴の音、あたしに話しかけたこの家の関係者と思われるおっさんはあたしの前から遠ざかっていった。

はぁ、仕方ない、部屋の中を探ってみるか。なにかわかるかもしれないし。外と連絡が取れそうなもの、電話とかはなかった。一人で過ごすにはあまりに広すぎる豪華な部屋に、あたしは監禁されてしまった。

「本当なの？　若草の馬を捕らえたって」
カケリを捕らえたこの家の主である男に、女は訊ねた。
歳は二十代前半に当たる彼女は、髪を二つに結わえ、黒色のショートドレス風のトレーニングウェアを身に纏っている。この家の主であり、自分の主人でもある男を、強い眼差しでキッと見据えながら問いかけた。
「ああ間違いなく捕まえてきた。ウミコよ、これでお前も安心できるな。明日のレースは不戦勝だ」
「そんな、…私はレースで必ず勝つわ、こんなことしなくても」
「勝つと言って先日負けたばかりではないか。新人とはいえ負けなしの勢いのある若草とは、勝負は避けるのが吉だ。安心しろ、その次のレースでは走らせてやろう」
「（臆病者…）」
誰にも聞こえない声量で、ウミコはつぶやいた。ぎゅっと悔しそうに口を結びながら、さり行く主の背を睨みつけた。

彼女ササオ・ウミコは元々表の世界で輝けた人材だった。十代の学生だった頃には陸上部に所属し、数々の大会で輝かしい成績を収めてきた。その舞台はいずれ世界へと、確実に世界へと向かう流れだった。当時はマスコミも彼女をスターのように取扱った。世界大会選考会を前にして、彼女は悲劇にまみえた。交通事故に巻き込まれ、足を負傷した。当然世界大会は諦めざるを得なかった。それだけでなく、選手としての道も困難を極めた。リハビリに励んだが、かつてのように走ることもできなくなり、成績もがた落ちした。あんな

に持ち上げたマスコミも、すっかりと彼女のことは取り上げなくなり、彼女に代わる新たなスターを持ち上げた。世間もまた彼女を忘れ、新しいものへと興味を引かれた。

足の怪我は選手としては終ってしまったが、日常生活には差し支えないほどに回復した。年月は過ぎ、周囲は心配して、彼女に新たな人生の道を生きよと勧めた。

「わかっている、それでも、私は…」

諦められない気持ち、あの頃のように走りたい。走り抜けたその先での、拍手喝さい。あそこそが、自分を認められ、自分として輝ける唯一の場所だった。過去への栄光の未練、それだけではなくて、それは彼女そのものといっていいものだった。

もう一度、走りたい。その想いをどうしても諦められず、リハビリトレーニングは欠かさず続けた。

努力のかいあって、ウミコは走れるようになった。だが、かつての記録には届く事はなかった。世間も、見向きもしてくれなかった。もうすでに、ウミコに代わる、いや今では当時のウミコ以上に持ち上げられている新たなスターがいた。帰る場所などもうなかった。それでもウミコは諦めなかった。走ることしか自分にはないという、思い込みと執念。そしてウミコは知り合いのつてから青原市のレースの話を知る事になった。ウミコは自らレースの世界へと飛び込んだ。緑丘区の区長リンドウのもとへ自分を売り込んだ。こうして緑丘の馬となり、ウミコはレースに出た。初めてのレースで、華々しく勝利し、かつて世間を魅了したスターウミコの片鱗を示したのだ。

先日デビュー戦を勝利で飾り、今だ負けなしという新人区長と無名の馬という若草区をリンドウは警戒していた。彼らのレースを観戦していたウミコにも、若草の驚異に不安を覚えたのは事実だ。ウミコ以上にリンドウのほうが彼らを警戒しているようだ。かつて世界やプロを目指せた実力者のウミコであっても、それはかつての話だ。

今のウミコは全盛期の頃のような強さはないだろう。それでも青原のレースの世界だからこそ、なんとか走ってこられた。だが圧勝などはなく、いつもギリギリだった。以前ならと歯がゆく思うことはあったが、過去には戻れない。ギリギリでも勝つしかない。走り続けるために、やっと見つけた自分の居場所を守る為に。それがウミコが馬である理由だった。

「マケンドー様」
議会が終った直後、カツがマケンドーのもとへと駆け寄る。カツから話を聞いて、マケンドーの表情が強張り舌打ちをする。
「言った傍から。すぐにカケリの元へ向かう」
車を発進させ、目的地へと急ぐ。

「ぼりぼりぼり…、この本もちっともおもしろくないし」
テーブルの上にあったお菓子は勝手に食べてる。いいよね、食べたって、監禁されてるんだし。いろいろ調べてみたけど、窓やドアすべてに鍵がかかっていた。空調は悪くないけど、…そういうことはどうでもよくって、逃げられそうなところがない。暇つぶしになるようなものも特にない。テレビはおいてないし、本棚にある本は、とてもあたし好みのものはなくて、マンガかゲームくらいおいといてほしいところだよ、気を利かせてさ。
次のレースに出るなってことは、次の対戦者ってことだよね？　その可能性は高いよね。だいたい犯罪じゃないの？　これってさ。危害は加えない、後で帰すとは言っていたけど、こんなことする連中なんて信じられるかね。ご飯は持ってきてくれるんだよね？…その時ってチャンスかもしれない。入り口のドアから入るんだろうし、その時を狙えば…。
コンコン

！？　うひっ、びっびっくりした。このタイミングでノックされるなんて。どきどきする心臓をぎゅっと押さえて深呼吸する。
「な、なに？！」
さっきのおっさんかと思っていたから、声に驚いた。
「警戒しないでくれる。私はあなたを逃がしてあげたいの」
女の人の声だった。

「こんなことになってごめんなさい。なんとかしてあなたをここから出してあげるわ」
キレイでパキッとした感じの女の人だった。そう言ってくれてるってことは、この人はあたしの味方なんだろうか。
「あなたは一体…」
「私も、あなたと同じ馬よ」
馬！？　ということは、どこかの区の代表？
「一体どこの区なんですか？　さっきのおっさんはだれ？」
味方であろうこの人なら、と思ったけど、それには渋い表情で首を横に振られた。
「ごめんなさい、なにも聞かないで。ここでのことも忘れてほしいの」
そんな都合あるか！
「だってこんなの犯罪」
「わかってる。私だって許せない。それに、不戦勝だなんて、手を汚して卑怯な事して得た勝利なんて、ガラクタでしかないわ。酷い事をしているあの男を許せないと思う。だけど、私にはこの道しかなかった。どうしても、失いたくないの。走りたい、ただそれだけ。
レースこそが、私の失えない居場所なの」
苦しげな顔、…なんだろう、あたしこの人をどこかで知っているような気が…。そうじゃなくても、この人は悪い人には思えなかった。

いきなり拉致されて監禁されて、むかついたけど、別に酷いことされたわけじゃないし、お菓子食べちゃったし。帰してくれるんなら、かまわない。…あ、ことを荒立てないほうが、もしマケンドーにバレたら、…ガクブル、めんどくさいじゃないか。問い詰めたい気持ちがないわけじゃないけど、帰してくれるのなら。
「わかりました。なにも聞きません。だからここから帰してくれますよね」
「ええ」

「おいカケリ！」
目の前で止まった車からマケンドーが降りてきた。マケンドーの家へ向かう道路を歩いて帰っているところを、見つかってしまった。
…やば、なんて言い訳しようか。
「無事か？！」
「えっ、あ…」
怒鳴られるかと思っていたら、予想外の第一声に、あたしは一瞬言葉を失う。ん？あれ、てことは、すでにマケンドーは知っていたってこと？　ショーリン君から伝え聞いたのだろうか、ショーリン君は無事なんだろうか。
出会った瞬間、マケンドーの顔は心配気な顔に映ったから、あたしの思考も狂い掛けた。
「あたしなら、無事だけど、ショーリン君のことは…」
「あいつのことはどうでもいい。俺にとって大事なのはお前だ」
「えっ…！？」
な、なんでそんなことを。って一瞬焦って「ぐわー」ってなる。ああそうだ、あたしはコイツの馬なんだった。だから大事なのは、カケリじゃなくて、若草の馬ってことなのよ、間違いなく。
「そうだね、若草の馬だもんね」
「ああ、明日のレースに馬がいないのでは話にならんからな。不戦

敗など冗談じゃない。ふざけた事をしてくれる、緑丘のリンドウめ」
「マケンドーもう相手のこと調べたの？」
「ええずいぶんと雑なやり方でしたからね。すぐにわかりました。カケリ様が無事戻られて、なによりです」
車からカツさんも降りてきた。
「カケリも無事帰ったし、今回の件、市長に告発してくるか。あの市長は不戦勝はおもしろくないとは言いそうだが、なんらかのペナルティは与えてくれるだろう」
「ちょっと待ってマケンドー！」
あたしは慌ててマケンドーを止めた。妙に心にひっかかるのと、やっぱり、なんか後味悪い気がして。どうせなら…。
「どうせなら、明日のレースでこてんぱんにしてやろうじゃない」
なんて返事が来るかちょっと心配だったけど、マケンドーはにやりと笑って「それもそうだな」と頷いてくれた。

レース当日、階段の前でマケンドーと別れて、あたしはスタートゲートへの通路を進む。
「無事レースに出れることを祈ってた」
彼女と…今日の対戦相手と向かい合う。どこかで会ったはずはないけど、昨日会ったばかりだけど、あたしは彼女をどこかで知っている気がしている。
「あたしも、今日のレースに出たかったから」
もしマケンドーがあのまま市長のところに行ってたら、こんな風にこの人にもう一度会えなかったかもしれない。また会いたいと思ってた。あたしはまだこの人にお礼を言ってなかったし、名前も知らない。
「私は緑丘区代表ササオ・ウミコよ」
「あたしは若草代表のマドウ・カケリ。あの昨日はありがとう」
「いいえこちらこそ、黙っててくれたのよね」

本当はマケンドーたちにばれてしまっているけど。
でも悔しいからこそ、自分たちの土俵でぎゃふんと言わせてやりたいじゃない。それに、ウミコさんとは、ちゃんとした場で会いたかったから。

「緑丘区長、昨日はうちの馬が世話になったそうで」
マケンドーのそれに、リンドウはぎくりと背中を震わせる。
「私を脅すつもりかね？」
「脅す？　思い上がらないでいただきたいな。あなたは脅すに値しない存在だ。今日のレースでそれを思い知らせてあげましょう。俺も、俺の馬もこんなところで負けなどしない。このレースでもってあなたを地べたに這い蹲らせる」
狂言でなく、マケンドーは本気でそう言った。自信に満ちた眼差し、自分よりはるかに若いこの男に、リンドウは気持ちで押される。カケリを誘拐し、若草の不戦敗を狙った時点で、リンドウはすでに負けていた。勝負を捨てた者は勝利の女神から見捨てられる。
だが、リンドウもやすやすと負けてやる心持ちの男ではない。未知数のカケリには警戒心を抱いているが、自分の馬のウミコもまた、馬としてはけして劣ってはいない。かつては、世界を狙えた足なのだ。ぽっと出の新人にあっさり負けてやるほど、ウミコも勝負弱くはない。

あたしとウミコさんそれぞれスタートにつく。
例のアナウンスが流れて、スタートゲートが開く。
お互い見据える先は同じで、もちろん、ゴールだ。

『お前はお前のために走れ』

マケンドーに言われたとおり、あたしはあたしのために走る。あたしの目的の為に、自由を勝ち取る為に。

マケンドーとリンドウ、それぞれの席につき、一見デスクワークに思える形でのそこが彼らの戦場だった。
目の前のモニターに次々と暗号やら問題が表示される。それをキーボードやタッチパネル操作によって解いていく。制限内に解ければ該当するトラップは解除される。頭の回転とスピードが要求される。またすぐ上に別のモニターが設置されて、そこには自分の馬である走者が映る。もちろんリアルタイムで表示されている。走者の様子を確認しながら、また素早くしかけを解いていかねばならない。
マケンドーはあまり馬のほうを確認しなかった。チラリと一瞬だけ見るだけで、ほとんど自分の画面に集中していた。

進む先、コースの下から壁が競りあがってきたり、落下物が進路を塞いだりしたけど、あたしがたどり着く頃には障害は回避されている。壁に穴があいて通れるようになったり、落下物が散らばった脇に滑り台が現れて落下物をそちらに流して行ったりして道が開ける。あたしはただ走ればいい。トラップはすべてマケンドーがなんとかしてくれるから。
ウミコさんも速い。すぐ横に並んでいる。わずかな差があるけど、向こうのトラップも順調に解除されていっているようだ。だから、ここはあたしとウミコさんのガチンコ勝負だ。
「負けないわ」
「あたしも負けたくない！」

ウミコさんには負けてほしくないと思った。だけど、あたしも負けたくない。でもそれを両方叶える事ってムリだし、それが勝負って

やつなんだし。
駆け抜けた先のゴール、全力を出し切ったあたしたちは、膝をついて肩で息をしていた。
『若草ー勝利ーー』
場内に響くアナウンス、勝ったんだ。
「負けちゃったわ。でも、気持ちよかった。ありがとうカケリさん」
汗を弾かせながら、笑顔でウミコさんはあたしに手を差し出しながらそう言った。
「こちらこそ、いいレースでした。またウミコさんと走ってみたい」
握手。
「ええ」

あたしはあたしのために走ればいい。
優勝して、自由を勝ち取る為に。だけど、それだけじゃない気がしている。あたしにとってレースとはなんなのか。
居場所？
あたしがあたしとして、いられる場所、なのかな？
「なにをぼけっとしている、いくぞカケリ」
「うるさいな、わかってるってば」
余韻もへったくれもあったもんじゃない。

第五話　感情、それは走るもの

今日は朝早くから、マケンドーに連れ出された。午前中のトレーニング、今日は中止だって聞いて、いったいどこに連れて行かれるのか。車中でマケンドーに訊ねたら…

「俺は初めて行くところだが、お前は好きなんだろ」

「は？　だからどこなのかって聞いてるんだけど」

マケンドーハッキリと答えろや。

「カケリ様、ついてからのお楽しみという事で」と車を運転しながらカツさんが答えてくれた。

「そういうことだ」

と偉そうにシートにもたれるマケンドー。

お楽しみってなに？　…怪しい。

「まあ、あれだ。お前もたまには…」

「へ？　たまには、なに？」

「っ、ごちゃごちゃとうるさくするな、到着するまで大人しく座ってろ」

ぐいっとマケンドーに乱暴に頭を押さえつけられて、あたしはむきーとなる。

「ちょっとなにすんのよ、大人しく座ってるじゃない！」

おどりゃーと反撃とばかりにあたしはパンチを繰り出すが、あっさりとガードされてしまう。むきー。

「言ったそばからその態度とはな、このじゃじゃ馬がっ」

「うっさいこの鬼畜ドS男がっ」

「お二人とも、車内でじゃれ合うのは大変危険ですので」

着いた先、見覚えのある場所だった。

「パラダイス銀河ランド…、ここ？」

星空モチーフのゲートの前で、あたしは後方の二人へと確認するように振りかえる。
「カケリ様、こちらは初めてですか？」
「ううん、過去に二回ほど遊びに来た事あるけど、…ここになんのようで…」
パラダイス銀河ランド、子供の頃に友達と遊びに来た事はあるのだけど。え？親に？ないない、うちの守銭奴親には。うん、友達の家族とね、一緒に来たっていう。まあつまり遊園地だ。
「なんのようだと？　遊ぶところではないのか？」
まあたしかに、遊ぶところですけどね、…あ、遊ぶ？
「遊ぶ？　誰が遊ぶの？！」
ゲート前を歩く人たちがちらちらとこちらを見ている。遊園地を前になにを言ってるんだこいつらってかんじなんだろう。でも、疑問じゃない？　マケンドーが遊園地だなんて。
「そこまで説明しないといけないのか」
くっと呻きながらマケンドーが眉間を手で押さえている。
「わかんないでしょ、ちゃんと説明してもらわないと」
「カケリ様、今日はカケリ様がリフレッシュされるようにと、マケンドー様のご厚意でこちらにお連れしたのですよ」
とカツさん。…え？
「あたしのため？　なんで？」
マケンドーの気遣いとか、なにかあるんじゃないのか？　怪しすぎる。
「…お前は…そこまで説明しないといけないのか…」
「カケリ様、少しはお察しいただければと…」
「ううん、…いやいやわかんないし」
はーー、とマケンドーが溜息をついて、つまりだなと説明を始める。
「カケリ、お前は若草にとって大事な馬だ。レースに悪影響をもたらせないためにも、精神面にも気を使ってやらんと思ってだな」
「…え？　だからどういう意図で？」

「先日の件は、約束を守らなかったお前に落ち度はあるが、俺の監督責任でもあるからな」
「先日のって…、拉致されたこと？」
来てくれた時、真っ先に怒られると思っていたから、ちょっと拍子抜けしたんだよね。…あの時のマケンドー、本当に心配そうな顔していたし。…馬であるあたしになにかあったら困るからだもんね。別に嬉しいなんて思わないし。
「少しでもカケリ様の心のケアになればと、マケンドー様のお心遣い受けてくださいカケリ様」
「あ、あの、別にケアとかって、そりゃいきなり攫われて驚いたけど、全然平気だし。そんなデリケートなハートの持ち主なら、レースなんてやれてないって」
実際なんてことなかったし、お菓子もおいしかったし。閉じ込められてどうなるかって不安はあったけど、平気だったのはウミコさんがいたからってのが結構でかいのかもしれない。
「今日の用ってあたしのためなの？　なら余計な気遣いっていうか、あ今から帰ってトレーニングやるし」
「ふ…、たいした馬だなお前は。まあそれでこそ俺の…」
「あ、こんなとこでいつまでも立ち話していたら邪魔になるよ。早く駐車場にもどろ」
「カケリ様、ひょっとして遊園地お好きではないのですか？」
「え、いや好きですけど。あまり来た事ないけど、乗り物とか乗るの楽しいし」
「ではせっかくここまで来たのですから、遊んで行ってはどうですか？　さあ、マケンドー様も」
ニコニコ顔でカツさんはゲートのほうへと促す。あたしはもう帰ってもいいかもって心境だったけど、遊園地で遊ぶのは嫌じゃないし。でもいいのかな、こういうところ、マケンドーって苦手なんじゃ？
「そうだな、そのつもりで来たんだ。…俺は初めてだから見学がてらに乗ってみるのもいいだろう。あそこで入場料を払うのだな」

「えっちょっマケンドー？」
なんだあいつノリノリか？　初めてなの？　興味心で？
すたすたとあいつはゲート前の受付へと向かっていった。
「いいのかなー」
「今日はご遠慮なく、楽しんでくださいカケリ様」

あたしたち三人は入場パスポートを購入してゲートを通過する。パラダイス銀河ランド、目をひくドハデなアトラクションはないけど、ジェットコースターや観覧車、メリーゴーランドやゴーカートなどの定番は一通り揃っている。よくも悪くも普通の遊園地だ。特別流行ってはいないけどまあなんとか廃れず続いている若草唯一の遊園地。子供を連れた家族連れや、若いカップルがちらほらと。乗り物もそんなに並ばないで乗れる。マケンドーからパスポートを受け取る。
「おおっ一日乗り放題のゴールドパスーーすっげーー」
くっ貧乏人には高嶺の花のゴールドパスだと？！　よっしゃ元をとりまくれるほど乗りまくってやる！！
「遊園地とは子供の遊ぶところだと思っていたが、意外と大人も多くいるのだな」
周囲を見渡しながら、マケンドーがつぶやく。そういやこいつ初めてとかさっき言ってなかったっけ。
まあカクバヤシのお坊ちゃんがこんな庶民の遊園地になんて遊びに来ることはなかっただろうけどさ。
「へぇ、知らないんだマケンドー。たしかに子供向けのアトラクションも多いけど、子供には乗れないものは多いんだよ。特に絶叫系は身長や体重制限もあるし、心臓の弱い人もご遠慮くださいってアナウンスもあるしね」
「ふ、なるほど、あの類は度胸試しといったところか」
とマケンドーが見上げる先は、レールを走るスピード音とそれに混

じる「きゃー」といった悲鳴の声。
一回転のあるジェットコースターだ。あれ前に乗ったことあるけど、最初はかなり怖かったはず。
マケンドー乗ったことないんだよね？　にやり。
「そうだ、アレ最初にいこうよ」
にやにやとあたしはジェットコースターを指差す。
「何事も経験だな。いいだろう」
「悲鳴を上げた人が負けってことで、くくく、なにかバツゲームでも」
「悲鳴を上げない自信でもあるのか？　おもしろい度胸試しなら受けてたとう」
乗ってきたなマケンドー、ジェットコースター初体験の無様な姿を笑ってやるわ！
「では私はここで待っていますので、楽しんでくださいませ」
カツさんを残して、あたしとマケンドーはコースターの乗り場へと向かった。

「――なかなかおもしろい乗り物だな、あのジェットコースターというのは」
「おかえりなさいませ、マケンドー様カケリ様」
く、マケンドーのやつ悲鳴どころかイキイキとした顔になりやがって、…つまらん！
「乗り放題ということだし、もう一度乗ってみるか」
嬉々としてまた乗りに行くつもりか、恥ずかしいなはまりやがって。
くっ、なにこの敗北感、別に負けてなんかいないけど。
「カケリ様はどうされますか？」
「あー、あたしはちょっとトイレに」
「わかりました。こちらでお待ちしてますので」

トイレをすませて外に出たあたしを、意外な声が呼び止めた。
「カケリ！」
マケンドーでもカツさんでもないその声。あれ、聞き覚えがある今の声ってまさか…？
我が目を疑いたくなる信じられない光景。あたしの目の前にいるのは、天使君だった。
「え、えっ、なんでここに？」
驚くあたしとは対照的に、天使君はなにが不思議なの？といった表情で
「どうしたの？　カケリ」
「まさかこんなところで会うなんて思わなくて」
「別に不思議な事じゃないよ？」
そう言ってあたしの手をとる天使君、それって…つまり…、こうして出会うことは不思議じゃない、あたしたちは運命の相手同士ってこと？！
天使君にキラキラな瞳でそんなセリフはかれたら、間違いなく惚れてしまいまくりでしょうがーー！さっきから体の奥からきゅんきゅんする音が聞こえてくる気がしてる。
こんな偶然だけでも、あたしは幸せすぎて舞い上がりそうなのに、天使君ってば、さらにあたしを驚かせる行動に出るんだもの。あたしの手を天使君がとって、
「いこっカケリ」
なんてキラキラな笑顔で手を引くんだもん。なにこれ、夢なの？あの日見た夢が正夢になるの？！このままどこへでも行ってしまいたいよ、もうっっ。
「って、ちょっどどこに？！」
ドリームしながらも、あたしは慌てる。天使君どこに連れて行くつもりなの？　天使君にだったらあたしどこでもかまわないけど！むしろ連れて逃げて！！キャッ

「あれ乗ろ、カケリ」
これまたキラキラスマイルで天使君があたしを誘ったのは、観覧車だった。か、観覧車ってラブコメでラブイベント発生率激高のスポットじゃないかーーー！そんなところにあたしを誘うなんて、これってまさか、天使君脈あり？てかありまくりだったりするの？ど、どどどどうしよう、両想いなんて経験したことないからわかんないよーー。
両想いなんて都市伝説でしょ？　両想いなんて宝くじ一等当たるくらいのラッキーな人だけにくるもんでしょ？いいいのか？あたしなんかが。
乗り場前であうあうしているあたしの顔を、天使君がのぞきこむ。
「カケリ、嫌？」
違う違うむしろ逆！って主張をあたしは首をぶんぶか横に振って示す。
「よかった、いこっ」
ひゃあああーー、乗っちゃったよ、あたし天使君と二人っきりでラブコメのイベントスポット観覧車に乗っちゃったよ！なにか起こるフラグ？どきばくはつする。たしけて。

「わー、すごい。一番上につくの楽しみだねカケリ」
向かい合って座るあたしと天使君。ひぇー、ぎりぎり膝が当たりそうな距離、嬉しいけど恥ずかしくて困るよこの距離。
「あ、あの天使君なんでここに？」
きょとんとした顔で天使君が見つめ返してくる。
「テンシ？」
訊ねられてはっとする。あわわ、あたしってば心の中のあだ名で呼んでしまった。天使君って。きゃーーー！
「ご、ごめん勝手なあだ名で呼んだりして。その、名前よく知らなくて…」

「あ、そっか、ボクのこと？　名前は…アマツカ」
「アマツカ？　アマツカ君って言うんだ」
アマツカアマツカアマツカ…天使君の名前アマツカって言うんだ。
アマツカ君…。うわーもう名前だけできゅん死ねる！なんてステキな響きなのアマツカーー！
「アマツカ君は、一人なの？　誰か連れの人とか…」
遊園地で一人で遊びに来ている人って普通いないだろうし。もしいても、その人たちほったらかしてあたしを誘うというのも変な気がするし。
「ううん、いないよ。カケリはだれか待ってたの？」
「あ、ううん、だ、だいじょうぶ、気にしないでいいよ」
カツさん待たせているけど、大丈夫だよね？　トイレが混んでいたとか言い訳すれば。まあ一応園内にいるわけだし。
「よかった。カケリと、二人きりで話したいって思っていたから」
！！？？
なにこの展開、あたしラブコメ的に殺されるんですか！？
どぎゃっと勢いよく生えてきたタケノコみたいに、フラグがたった？！

『君はボクの運命の人だよ、好きだよ…カケリ』

むきゃーー、あの夢のあのシーンあのセリフが今まさに脳内再生された。アマツカ君の声で！ヤバイ、ヤバイですよ。ああもうそんなこと言われたら、あたしもう…昇天しちゃうよ。
ああああ頭の音うるさい。アマツカ君の声ちゃんと聞きたいんだから、ちょっと血液自重して！
「は、話ってなに？」
うひゃ、緊張のあまり声が上ずってるし。
いっ、そんなまっすぐな目で見つめないで、アマツカ君。あたしは、

どきどきのあまり完全に固まってしまう。
「カケリのこと、知りたい」
「！！？？えっええっ」
これはもう告白ですか？　あたしのこと知りたいって感情は、それは間違いなくこから始まる二文字のアレですか？！
ど、どうしよう、あたしのこと知りたいって、なにから話したらいいんだろう。名前から？あ、そういえばなんで…
「そういえば、気になっていたけど、アマツカ君なんであたしの名前知ってたの？　以前どこかで会ったことあった？」
最初に河川敷で会った時、あれがはじめての接触のはず、なのにアマツカ君はあたしの名前を知っていた。もし会ったことがあるのなら、アマツカ君みたいな美少年を忘れるはずなんてないのに。
でも、もし会っていたのなら、覚えていなかったあたしってすごく失礼になるじゃない。ちょっとびくつきながら訊ねてみた。
「遠くからだけど、ずっと見てたから、知ってたよカケリのこと。初めて目にしたときから、気になってた」
そんな真剣な眼差しで「見てた」とか「気になってた」とか言われるともう、もうきゃーーーーて脳内でじたばたしちゃってますが。
ああもうアマツカ君ったら！だめきゅん死ぬ！
「その時から、聞きたかった。カケリの気持ち、知りたくて」
そ、そんなあたしの気持ちなんて、決まってるよアマツカ君！
「あたし、あたしも、あたしの気持ちは」
「カケリ走っているとき、どんな気持ち？」
「あたしの気持ちは、え？　は、走っている…時？」
こくり、とにこにこ顔でアマツカ君が頷く。…え、えと、え、ええ？！　なんですと？！
「は、走って、あ…あのアマツカ君…。あ、ああ！」
ふと斜め下に目線を泳がせた時、バチッと目があってしまった。マケンドーとカツさんだ。や、やばい。
幸い？にも観覧車はもう地上に近づいていた。あわあわと脳内パニ

ックしながら、あたしは慌てて観覧車を降りた。
「あ、そうだ。アマツカ君、その連絡先聞いてもいい？」
慌てて走り出した足を引きとめて、あたしは大切なことをここで終わりにしたくなくて、振り返りながらアマツカ君に訊ねた。
「また会えるよ、じゃあね、カケリ」
軽く手を振って、アマツカ君は観覧車から軽やかに降りると、あたしとは反対の方向にと走っていった。
あっという間に姿が見えなくなって、彼は幻だったのかなと思ってしまいそうなほど、あっという間に消えてしまった。
まるで、夢のような時間だったな。
と、いかん、余韻に浸っている場合じゃなかったわ。マケンドーたちが見えたほうへとあたしは走った。

「ずいぶんと遅いトイレだったな、カケリ」
う、ちょっとトイレ休憩のつもりが三十分近く経っていた。さすがに、のんびりしすぎだよね。
「いやトイレ混んでて、あっちこっち走っちゃって」
しらじらしいウソはすぐにばれた。
「とぼけるな、のん気に乗り物に乗っていたではないか」
「うう、どうしても観覧車に乗りたかったんだよ…」
ほんとはアマツカ君に誘われたからだけど、別にうそじゃないし、乗りたかったし観覧車。
「カケリ様、それは別にかまわないのですが、せめてお声をかけてからにしてください。心配してしまいます」
「あう、ごめんなさい」
もううな垂れるしかない。下手な言い訳も通用しないし。素直に謝るしかない。
「…なにかあったのか？」
ぎくり。

マケンドー、あの時アマツカ君に気づいたんだろうか？　角度的に距離的に、気づかなかったとしてもおかしくないけど。別にやましいことなんてなにもないけど、マケンドーとの約束…には違反してしまうわけで。いっそ見切りをつけるならそれでもかまわないけど。
「ずいぶんと疲れた顔をしているからな」
「え、あいや、別にそんな疲れているわけじゃ」
ふい、とマケンドーが時計に目をやる。
「時間はまだあるが、あまりお前を疲れさせるわけにもいかんしな。もう帰るか？」
「そうですね、カケリ様、また日を改めて遊びにいらしてはいかがでしょう」
「ああ、うん、そうする」
アマツカ君にどきどきしまくって、疲れた気がするし。なんだこのエネルギー消費はパないね。
まさかこんなところで会えるなんて、思いもしなかったけど、また会えるって言ってたし、また会えるよね？　アマツカ君。

帰宅後、議会へと向かうマケンドーが車内でぼやく。
「アイツ、あまり楽しんでなかったみたいだな、…俺は間違ったのか…」
「そんなことはありませんよ。マケンドー様のお心遣い、きっとカケリ様にも伝わっていらっしゃるはずです」
カツのそれに、マケンドーは同意するでもなく、怪訝な顔で窓の外へと顔を向けた。
「区民の心をわかる前に、アイツ一人の心すらわかってやれんのはな…」

「こんの腐れ外道がぁッッッ！！」
「あだっ、ちょっなんでそこまで言われなきゃならっ、あだっ、あ

だだ」
ヒヨコさんから理不尽な暴行を受ける。だれかもうこの人なんとかして！
丸めた週刊誌でぽこぽこ叩いて、しまいにはおどりゃーとそれを投げつけてきた。その理由はというと、ええもうお分かりいただけただろう。ようするに嫉妬ってやつだ。あたしがマケンドーに遊園地に連れて行ってもらったってことが、心底許せないらしい。ヒヨコさん、もう少し心に余裕を持ってほしいよ。
「まさかと思うけど、まさかありえないはずだけけど、アンタマケンドー様と二人きりで観覧車とか乗ってないでしょうね？　乗ってたら死刑確実！」
ギリギリと歯軋り音をさせながら、悪魔のようなオーラを放つヒヨコさん。あたしはマケンドーのことなんてなんとも思ってないのに、て何度言っても理解してくれないんだよね、この人。
「別にマケンドーとは…」
観覧車…、乗ったのはアマツカ君と。…ふわ、ヤバイ思い出しただけで顔が赤くなるにやける。
「っっ！　乗ったのね、マケンドー様と、くそがっっ死にさらせ！！」
「は？　え、ちょっ、違うってば！　話を最後まで聞いてーあだだだ」

「ふん、今日はこのくらいで勘弁してあげる。でもこれ以上調子に乗ったら、アンタわかってんでしょうね」
悪の組織の下っ端みたいなキャラだな、ヒヨコさんって。…まあ周囲の目もあるし、本気の怪我はならないように手加減はしてくれているみたいだけど。てことはまだ理性は働いているみたいだね、あれでも…。
また、こんなところにほおり投げて放置していくし。とあたしはヒ

ヨコさんが投げつけた週刊誌を拾い上げた。パラパラと自然にめくれたページに、あたしは目を奪われた。
「！？　これって…」
記事の扱いはさほどじゃなかったけど、そこに目が留まったのは写真の人物に見覚えがあったから。あっ、そういえばあの時のひっかかり。有名人だったんだ、と言ってもかつてのって言ったほうがあってるのか。その写真の人は、先日あたしがレースで対戦した相手…ウミコさんだ。
驚いたのはウミコさんが載っていただけじゃなく、記事の内容。
「なにこれ、酷い…」
かつてトップアスリートだったウミコさんが、事故のせいで現役を引退。その後の消息が絶たれていたが、今の彼女は、といった内容で。青原市の緑丘区にひっそりと移り住み、現緑丘区長の愛人になっているっていう。そんなウミコさんを嘲笑うような内容だった。レースのことは書かれてなかったけど、だけど酷い酷すぎる。
怒りが湧きあがってしょうがなかった。この腐った外道な記事書いたのどこのだれよ？！　くっそー今目の前にいたらボコボコにしてやんのにっ！

今日はレースの日だ。場内の控え室が並ぶ通路で、あたしはウミコさんに会った。
「ウミコさん、こんにちは」
「あ、カケリさんこんにちは、あなたも今日出番だったのね」
「はい、今日は三番目なんで」
「そう、じゃあ私のすぐ後になるのね。お互いベストを尽くしましょう」
「はい」
ふふとウミコさんが笑う。やっぱりいい人だな、ウミコさんは。
「ねぇ」と言って、ウミコさんの顔から笑顔が消える。

「今後も警戒は怠らないほうがいいわ。あなたたち若草は注目されているみたいだから。…悪意を持って近づくのが、リンドウだけではないと思ったほうがいい。悲しいけれどそれが事実」
まるで自分の事のように語るウミコさん。！　そうか、自分の事なんだ。あの記事のこと思い出す。ウミコさんは今までそういう経験をしてきたんだ。馬となったことで、ううん、それ以前に世間から注目を浴びた有名人だったから。
「あんな記事…、でたらめですよね！　あたしははなから信じてませんから！」
数秒ウミコさんは黙り込んだ。あたしの言った事に気づいて「ああ」と返事をする。
「そっか、知ってたのね。私がリンドウの愛人として食いつないでいるとかいう。
ええ、でたらめよ。私とリンドウは主人と馬、それ以上でもそれ以外の関係にもなったことがないわ。だけど、捏造なんて簡単にできちゃうものなのよ。奴らは適当な証拠をでっちあげて、記事にする。世間が食いつきそうな素材を選んで、おもしろおかしく調理する」
「そんな酷い、でたらめのでっちあげだなんて、そんなことがまかり通っていいなんて。ウミコさんも反論すればいいのに！　わかってくれる人はわかってくれるはずだよ」
あたしみたいに、ウミコさんのことわかろうとする人、きっと他にもいるはずだよ。
でたらめな記事を真に受けて、ウミコさんをそう言った目で見る人がいるかもしれないなんて思うと、すごく悔しい。
「悔しくないわけないわ。だけど連中に牙をむいてそれで解決するわけではないし、一度そう言う噂が流れれば、人はどこかでそう言う目で見てしまう。それに私はレースに集中したいから、そんなことにエネルギーを使いたくないのよ。それに…、私をわかってくれている人はちゃんといる。カケリさん、あなたは私の事そんな人間じゃないと信じてくれているでしょう。十分よ」

「ウミコさん…」

今日のレースもなんとか勝利した。控え室前の通路で、馬には思えない（ここでは浮いた感じ）の男の人がいて気になった。関係者？にしては挙動不審で、怪しくて。

「あの、なにやってるんですか？」

声をかけると、「うわっ」と一瞬驚きの声を上げて、すぐに「いやぁあはは」と誤魔化すように笑った。胡散臭い人だなと思うあたしに気づいたのか、怪しい者じゃないよとアピールしてきた。

「君、ササオ・ウミコさんのこと知ってる？」

「なんですか？あなた知り合いですか？」

いきなりウミコさんのこと訊ねてくるなんて、怪しいオーラがビンビンしている。もしウミコさんのちゃんとした知り合いならこんな訊ね方しないと思うし。

「ああまあ、知り合いていうか、ちょっとしたね」

はっきりしない言い方がますます胡散臭い。

「そういや君もレースに出てるんだってね。今話題の鋼鉄の天使も十六歳だって聞くし、君もそれくらい、いやもしかしてもっと若いんじゃないかな。君みたいな子がこんなところにいるなんて、なにか訳ありってことだよね？」

う、なんだこの人、気持ち悪い、ギョロッとした目ですごいまくしたてて迫ってくる。

「なんなの？　ちょっと失礼じゃ」

「なにしているの？　帰って！」

強い声が通路内で響いた。声を発したのは、こちらへと向かってくるウミコさん。

「やれやれ、レースのことは記事にできないし、日を改めてお伺いしますよ、ウミコさん」

にやにやと気持ち悪い笑みを浮かべて男はそそくさと帰った。さっ

きのウミコさん迫力合ったな、あたしまでびくっとしちゃったよ。
「だいじょうぶ？　変なこと聞かれなかった？」
「え、はい…、だれなんですか？　あの人、ウミコさんの知り合い？」
「まあね、いい意味での知り合いではないけど。某特社っていう出版社の記者よ。その中でもゴシップばかりの雑誌のね」
「え！　まさか、あの雑誌の記事書いた人？！」
ウミコさんの中傷記事を書いたあの記者だっていうの？
「自分で言うのもなんだけど、私昔はちょっとした有名人でね。当時はマスコミにもてはやされて、私もそれにのっかってしまったのが悪いんだけど。その頃にあの人のインタビューを受けたこともあったのよ。ずいぶんと目をかけられていたみたいだから、私が落ちぶれたっていうのが気にいらないんじゃないかしら」
「ウミコさんは落ちぶれてないし、それに、そんな感情であんなこと記事にするなんて、許せないよ！　あたし言ってくる」
「えっ、ちょっカケリさん？！」
まだ遠くまで行ってないはず。会場出てすぐのところに、さっきの嫌な記者の男がいた。車のほうへと向かう途中らしい。
「ちょっと、待ってよ！」
記者の男が足を止めて、こちらへと振り向く。
「ああさっきの、なにか？」
「あの記事書いたのあなたなんでしょう？」
「あの記事…、ああ、うちの本見てくれたんだ」
好きで見たわけじゃない、たまたまだたまたま。
「取り消してよ！　あんなのでたらめじゃない！　すぐに誌面に謝罪文でものっけて、あの記事は間違いだったってやってよ」
「でたらめだなんて、なんで言い切れるの？」
ところどころ噴きながらって態度が馬鹿にしててさらにムカツク。
「ウミコさんはでたらめって言ってたし、あたしもそう感じたからね。ウミコさんがなんで青原に来たのか知ってるの？　走りたいか

らだよ」
「レースのことは規制がかかっているから、記事にはできないんだよ。正直俺もレースのことにはあんまり興味なくてね、まあ仕事柄ゴシップをかぎつけちゃうわけ、そして読者もまたそういった話題を求めているからね、例えでっちあげの記事だとしても、彼女が区長の愛人ではない可能性はゼロじゃないってこと」
「そんな目でしか人を見られないほうが腐っているよ！　あたしはウミコさんを信じる。あの人を陥れるような悪が許されていいわけがない」
「？なにができるというのかな？　君みたいな子供に、レースで走ることしかできない馬に。少なくとも、君より俺のほうが地位だってあるわけだし」
また嘲るような笑いを浮かべて、悔しい、ほんとむかつく。感情が走るまま、あたしの手は拳を作っていた。振り上げる、はじける感情のままに、コイツをぶん殴って――
「カケリ！」
振り上げたままあたしの拳は止まった。アイツの声に引き止められた。
「マケンドー…」
「君の飼い主が現れたよ、大人しく引き返したらどうだい」
むかつく記者男をギッと睨みつける。でもそれにはコイツをびびらせるほどの効力なんてない。勝ち誇った嫌な顔で、あの記者の男は去っていく。
悔しくて、わけわかんなくて、あたしは両頬をぼとぼとと熱いもので濡らしていたんだ。

「だいたいのことはササオ・ウミコから聞いた。本人も気にするなと言っていたし、お前が口を挟む問題じゃないだろう。もう関わるな、お前にどうこうできることじゃない」
マケンドーはそう言うけど、あたしは腹の虫がおさまらなかった。

「ウミコさん悔しいって言ってた。あたしだけでもわかってくれるだけで十分だって。ずっと我慢しているんだよ。
ウミコさんにあたしは助けられたのに、あたしは助けてあげられないなんて、悔しいよ」
「…わかった。お前はカツに連れて帰ってもらえ。あの記者には俺が話をつけてこよう」
「！？　え、マケンドー、どういう」
「カケリ様、マケンドー様におまかせして、戻りましょう」
カツさんと一緒に、あたしは先に帰宅した。

後日、例のゴシップ誌にはウミコさんに関する記事の謝罪文が載せられた。マケンドーが出版元に上手く掛け合ってくれたらしい。これで少しはウミコさんが救われてくれるといいとあたしは思っていた。この時、マケンドーがどんな心境でいたかなんて、あたしは知りもしなかった。

第六話　立ちはだかる、鋼鉄の壁

「おおー、すごーい、新鮮だー」
ただ今、あたしはここ青原市のレース会場にきている。
といっても、今回は馬としてではなく、一観客として。
「おい、なにをきょろきょろしている。早く来い！　カケリ」
マケンドーがうるさく急かすので「はいはい」と席のほうへと向かう。
あたしとマケンドーとカツさんとで並んで席に着く。
走っている時とはまったく見えてくる景色が違うな。物珍しくてついきょろきょろしてしまう。
行ったことはないけど、スポーツの観戦とさほど変わらない感じかなぁ。結構お客さん入ってるんだ。
チケットは青原市民であれば購入できるらしい。…青原市民でなければ、原則不可。入場時に身分証の提示を求められるからね。
観客席に座るのは初めてのことだ。レースには何度か参加しているけれど、見る側ってのは初めて。ふぅ、楽でいいわ。チケット用意したのもマケンドーだし。
で、なんで今日はレースを観戦しているのかというと。
「今日は遊びに来たわけじゃない。偵察も兼ねてだな」
そういうのってマケンドーやカツさんの仕事じゃない？　あたしが来ることになにか意味でもあるのだろうか。
「中央東区…、前期のチャンピオンが今日出る」
「中央東って、まだ対戦してないとこだよね。チャンピオンってことは強いの？」
「…チャンピオンだから、な」
まあたしかに。
「中央東区の馬ですが、毎年変わっていますね。ただ、…変わらな

いのは…」
「カツ、お前のいいたいところは俺も気になっている部分だ。中央東の馬の特徴…」
「ん？　あ、そろそろスタートみたいだよ」
眉間にしわ寄せているマケンドーたちからあたしはコースへと目を向ける。

『皆様大変長らくお待たせしました！　本日の第一レース不動のチャンピオン中央東区、それに挑むは花本区！　中央東の馬、鋼鉄の天使の独走を花本は止めることができるのか！？　注目のレースまもなくスタートとなります！』
アナウンスが流れて、会場のテンションも上がり観客の声がところどころで上がる。
「鋼鉄の天使？　なにそれ、なんかのアニメ？」
「マスコミがつけた異名だろう。…よくつけたものだ、一つ前の中央東の馬は…たしか【鋼鉄のカモシカ】だったな」
「ええたしかにそうでした。鋼鉄シリーズと呼ばれているようですが」
鋼鉄シリーズってなんだ？　シリーズもののアニメみたいな響きか？　て好きだなマスコミはそういう変なあだ名つけるの。王子だとか天使だとか、こっぱずかしいだろ、そう呼ばれる本人は。
「鋼鉄って単語にこだわってんのかね？　マスコミは」
「いや、マスコミがこだわっているという理由ではないと思うが、まあ見ていろ、その理由は今にわかる」
「はぁ…」

レースが始まる。ファンファーレが鳴って、観客席のそこかしこでパンパンと爆竹が鳴るような派手な音がして、レースという名の祭りの始まりを伝える。

観客席からは馬が走るコースが見渡せ、上や下や横から次々とトラップが姿を現す。うん、でも中には隠れているトラップもあるんだよね。あのあたりやあのあたりなんて怪しいな、馬としての勘も含めつつコースを見渡す。それから観客席からは、正面に大きなモニターがあって、映画を見るような感覚で、あそこに馬たちが走っているところをズームアップして見られるんだろうな。て今モニターの映像が先ほどまで流れていた青草の観光案内や地元ニュースから切り替わって、本日のレース、中央東区と花本区の名がデカデカと表示された。

カウントダウンが始まると、自分が走る時とは違う、ドキドキを感じながら、スタートのあと少しの時を待つ。

『スタート！』

わぁっと観客席から湧き上がるような歓声が上がって盛り上がる。二人の馬が、スタート地点より飛び出す。モニターにグンと馬の姿が映し出される。花本のほうは二十代くらいの男性で、中央東のほうは、女の人、しかも若い感じ、いやそれ以上に気になったのは、彼女の足……。

「変わったブーツ、走りにくくないのかな？」

キラキラに光る金属のような素材に見える膝元まであるブーツで彼女は走っている。走りにくそうな見た目に反して、馬の彼女は表情変わらず華麗に走る。走りにくそうどころか、グングンと加速して、スタートして五秒もたたない間に、対戦者との距離を十メートルは引き離していた。トラップのほうも次々と解除されてく、そのスピードも早い、彼女の走りを止める事がないくらいだ。

「すごい、速い」

『圧倒的ーー！　中央東区鋼鉄の天使、ぶっちぎりのスピードでレースを制しましたー！　王者の独走はどこまで続くのか、こうご期待ー！』

二つに結った長い髪がなびいている。走り終えたチャンピオンの馬は、よく見たらかなり若い女の子だった。

「鋼鉄の天使、あの鋼鉄の義足を指してそう呼ばれている」
隣のマケンドーのそれにあたしは「えっ」と声を上げて話した本人のほうへと向く。
「義足って、ブーツじゃないの？あれ」
てっきり変わったブーツだと思ってた。義足ってことはブーツてことじゃないよね？えどういうこと？
「中央東の今期の馬、マスコミが鋼鉄の天使と呼んでいるのがあの娘…テンカワ・ワタルだ」
「テンカワ・ワタル…、鋼鉄の天使」
「中央東の馬には共通のシンボルがある、それがあの鋼鉄の足だ」
モニターに映るテンカワさんへと目を向ける。その鋼鉄の足、も気になるけど、あたしが気になったのは表情のほうだ。疲労を感じさせないクールな表情。只者じゃなさそう、走りから、あの独特の足から、それから崩れない表情。
「ぶっちぎってたよね、さすがチャンピオン。ていうかさ、ひょっとしてあの鋼鉄の足になにか仕掛けがあるんじゃない？」
見た目からして走りにくそうなんだけど、あのぶっちぎりのスピードは、普通に考えてもあの異様な足に仕掛けがあるような気がする。そこはマケンドーも否定しなかったけど、渋い表情で。
「かもしれんが、反則では無いからな、義足で走るなというルールはない」
「さっきからひっかかってたんだけど、義足義足ってどういうこと？　あれって特殊なブーツじゃなくて…」
義足ってのはつまり、自分の足ではなくて…ていう意味の…、え、あれ？
「一見してわかりにくいが、テンカワに足はない」
「……、足はないって、え、じゃあ、あの速さで、えっ…」
「カケリ様、大丈夫ですか？」
ショックで軽く目眩を起こしたあたしを、隣のカツさんが心配してくれた。「ああうんだいじょうぶ、…ちょっとびっくりしたよ。…

義足で。あんなに走れるなんて、すごいよテンカワさん…」
事実を知ってから、再びモニターに映るテンカワさんを見て、すごく高いところにいる人のように見えた。
なんだか、のどが渇いた…。
「ちょっと、ジュース買ってくる」
「ああ、ヘンなところに行くなよ」
客席から離れて、あたしは自動販売機の場所へと向かった。ジュース飲むついでにトイレによって。ここなら若草市民しかいないし、ヘンな連中もいないだろうから、カツさんたちも心配はしてないようすだ。あたしもそのほうが気楽でいいしね。オレンジジュースを飲み終えて、客席のほうへと戻るあたしは、意外な人物と遭遇することになる。意外というか、予想外というか、だけども、こうしてまた出会うことは不思議じゃなかった気もするその相手。
「カケリ」
エンジェルボイスがあたしの耳をくすぐる。キラキラオーラに目をしばたかせる。これは夢ではなくて、現実の続きで、たしかに今目の前にいる。夢のような相手。
「アマツカ君!?」
驚くあたしに、アマツカ君は優しいエンジェルスマイルで「そうだよ」と答えてくれた。
先日、遊園地で会って以来、また会えるってアマツカ君は言ったけど、こんなに早く、さらにこんな場所で会えるなんて思ってなかったから、あたしは慌てふためいてしまう。
「ぐ、偶然だね、こんなところでまた会えるなんて」
「え、偶然？　そんなことないよ、カケリ」
にっこり。とまたアマツカ君ってば、キラキラエンジェルスマイルで微笑むもんだから、あたしの脳内きゃーーって祭り状態になっちゃうよ！え、でも偶然じゃないって言い切るなんて、それってつまり、アマツカ君はこういいたいわけ？「偶然ではなく、運命なのだと」

なんて都合のよい解釈をして、あたしは頭をげんこでぐりぐりする。
「そっかアマツカ君も地元なんだ…、若草の人？」
それにはアマツカ君は頷かなかった。若草じゃないのかな、…となるとその周辺の区の人かな。よく若草で会ったし。行動範囲は近いのかも。
「ここには、よく来るの？」
話題を変える。こんなところで会うとは思わなかったけど、ここには青原市民なら入れるわけだし、アマツカ君がいたっておかしくないし。でもよくレースを見に来ているのなら、…あたしが若草の馬だってもしかして、ばれているのかもしれない。
「ううん、たまたま」
「え、たまたま？」
拍子抜けしたあたしが聞き返す。アマツカ君は「そうだよ」とまたさわやかな笑顔で答えた。
「あ、あたしもたまたまだよ。知り合いに誘われてね」
うん、うそじゃない、たまたまだし。観客としては来るの初めてだし。ちらり、とだいぶ先にあるあたしが座ってた席へと視線をやる。もしマケンドーに見つかったら、怒られるだろうな、どころか…アマツカ君に会えなくなるかもしれない。それは困る。早く席に戻らないと探しに来られたら困るし、でもせっかくアマツカ君と会えたから、もう少し一緒にいたいし。
「うん、そっか。じゃあ、またね、カケリ」
「え、あっアマツカ君？！」
さわやかスマイルで、ひらりと片手を挙げると身を翻してアマツカ君は客席の向こうへと走り去ってしまった。追いかける余裕もなくて、あたしは開いたままの口でぼーぜんと立ち尽くしていた。風のごとく現れて去ってしまうアマツカ君。
あ、もしかして知り合いといるって言ったから、気を使ってくれたのかな。…でもここに観に来ているのなら、また会えるかも。ううん、ここじゃなくてもまたどこかで会えるかも、そんな気がする。

運命の相手ってそういうもんだよね！
「おい、なにをにやにやしているさっきから」
「うぐわっ」
客席についてから、ずっとにやけていたらしいあたしの表情に、マケンドーがつっこんできた。ううそんなに顔に出ていたかなぁ？
　出ているよね、自分でもわかるわ。ああでも自然とにやけるよ、うへへ、アマツカ君ｖ
「なにか嬉しい事でもあったのでしょうか？」
「えっええええっと、それは…」
しどろもどろになるあたしに、マケンドーが疑念の顔になる。
「お前まさか、知り合いと立ち話でもしていたのか？」
ぎくぅっ！
マケンドーとは契約期間中は、知り合いとの関係ももつなって言われてるんだよね。アマツカ君のことは絶対にばれてはいけない。
「ううん、そうじゃなくて、その…すっごくおいしいジュース見つけてね、それで」
なんかすごく苦しい言い訳になったんだけど、あわわわわ。
「どのような味のジュースですか？」
横のカツさんのツッコミにあわわわわと内心焦る。そんなつっこまないでくださいよ。
「ええっと（さすがにオレンジジュースとかだとうそくさいし）、えっとですね、なんというか不思議というか、トロピカルな味わいというか…」
そんなジュースあとで教えろとか言われたらどうしようかとかね、もうパニックになりつつ言い訳する。
「なるほど、好みの味を見つけると幸せになりますよね」
よかった、カツさん、詳細訊ねてこなくて。
「単純な奴だな、お前は」
「う、うるさいっっ、いいじゃないか、おいしいもの好きなんだよ」
ありもしないジュースのことで意地になるのも馬鹿馬鹿しいね。

「まあここで知り合いに出会ってもおかしくないだろうが、余計な話などするなよ。挨拶程度に留めておけ」
「はいはい、わかりました」
アマツカ君とのこと、マケンドーにはばれないように気をつけないとね。…またどこかで会えるといいな。…また二人っきりで。うん？そういえばいつも会うときは二人っきりだった。ひゃっ、なんだか秘密の関係みたいでどきどきするかも、どきどきする！
「さて、レースも見終わったことだ、戻るぞ」
すっくとマケンドーが立ち上がる。
「え？　次のレースがもうすぐ始まるんじゃ？」
「中央東がすんだからな。今日の目的は果たした。時間は有効的に使わんとな。帰ってすぐにトレーニングだカケリ」
うへー。のんびりできるわけではないのか。…まあそれが目的とは言ってたけど。
中央東のテンカワさん、さすがチャンピオンだけあってぶっちぎりの速さだった。
「不安か？」
心を見透かしたようなマケンドーの言葉に、あたしは「そりゃ」と頷く。
「勝てる気がしないんだけど、テンカワさんに」
素足でなら速く走れるといっても、あの走りに全力でも敵わない。それはあたし自身だけじゃなくてマケンドーだって感じてる事だと思う。
「なら不安を感じなくなるくらいトレーニングに励む事だな、その他の事は俺にまかせとけ」
「えっあっ」
「いつまでのんびりしている。とっとと戻るぞ」

「鋼鉄の天使のレース観戦してきたのか」

モリオカさんとトレーニングの合間にした会話に、鋼鉄の天使ことテンカワさんの話題が出た。
「あ、はい。テンカワさんのこと、知ってるんですか？」
「いや知り合いではないけどね、レースは見にいった事があるからさ」
なるほど、それなら知っててもおかしくないよね。…あたしは見にいくまで知らなかったけど。
「すっごく速いんですよ、さすがチャンピオンというか」
「自信なくしたのかい？」
「…そもそも自信なんてありませんけど、あたし素人中の素人だし」
なんで、マケンドーはあたしを馬に選んだのか、いまだにわかんないけど。
「力をつければ自ずと自信はついてくるものさ。それにはひたすら努力するほかない。鋼鉄の天使の子だって最初から速かったわけじゃないと思うぞ。あの足に慣れることや、速く走ることに努力してきたに違いない」
義足って言ってたし、自分の足じゃない足で走るのってそこに至るまで大変な努力があったのだろうな。あんなに速く走れて、涼しい顔でいられるのも、そこにたどり着く為に流した汗だってとんでもないに違いない。特別に見えていたテンカワさんが少しだけ近づいて思えた気がした。
「きっと区長もそういうことに気がついてほしくて、レースを見せに連れてったんじゃないかな？」
若草の勝利にこだわるマケンドーが、あたしが自信失うような選択なんてするとは思えないし、…でもだからってテンカワさんのレースを見て、あたしが高みに昇れるなんて展開には確実になるわけがなくて。
あたしはまだマケンドーのことをろくにわかってないんだよな。
「カケリちゃん！」

トレーニングが終った直後、モリオカさん退出後に入れ替わりで現れたのが、ショーリン君だった。外の窓から泥棒みたいに入ってこなくても…。
「大丈夫だった？！」
すごく心配気な顔であたしのほうへと駆け寄ってきた。ああそういえば緑丘の区長に拉致された時以来だ。
「ほんとごめん、おれがついていながらカケリちゃんを危険な目にあわせちゃって」
「いいよ謝らなくても、なにもなかったんだし。それよりショーリン君のほうこそ大丈夫だったの？」
「おれは怪我したってかまわないけどさ、悔しいよ、カケリちゃんを守れなかった事が…」
「ああそんなもう気にしなくていいからほんと、二人ともこうして無事なんだしさ、ね！」
キリキリと悔しそうな顔で俯いていたショーリン君が顔をあげる。でもその顔はほっとしたものではまったくなくて、どこか不機嫌を思わせるような顔つきで。
「カケリちゃんは兄上が助けに来てくれるからって信じていたから？平気だったのか？」
「え？　いや信じていたからって言うか、まあ結果助けに来てくれたけど」
実際助けてくれたのってウミコさんなんだけどね。もしウミコさんが味方じゃなかったら、マケンドーが助けに来てくれてたんだろうか？
「兄上の事信じたって後悔するだけだよ、あのさカケリちゃん、マジで兄上のこと信じるのやめなよ」
冗談ぽくなく、怖いくらい真剣な表情でショーリン君はそう言った。そういえば、ショーリン君あの時もマケンドーのこと悪く言ってた。マケンドーはカクバヤシの出来損ない、恥ずべき存在だって。それってどういうことなんだろう？でもショーリン君そんな言い方する

のってつまり、…ショーリン君はマケンドーに裏切られたことがあるからってことなのかな？
「ショーリン君は、マケンドーに裏切られた事があるの？」
聞いてもいい事なのかな？と恐る恐るとたずねてみた。
「そうだよ、裏切られたね。あの人は学歴だって三流だし、エリート街道をひた走ることが義務付けられてるカクバヤシ家に泥を塗ったも同然なのさ」
エリート街道を踏み外したってことがマケンドーを許せない理由？
　失敗を許せないなんて、厳しすぎる家柄なんだな。
「信じるに値しない存在だってわかっただろう？」
「えっ、ああ、うん…」
ショーリン君の迫力に押されて頷くしかなかったけど、ショーリン君ちょっと厳しすぎるよ。

「なんだ？　ぼーっとして、臆したか？カケリ」
マケンドーの声であたしはハッとして顔をあげる。隣に立つのはマケンドーで、レース本番へと向かう通路の途中だ。
「テンカワさんはテンカワさん、カケリ様はカケリ様です。ご自身の力を信じてがんばってください」
にこりと優しく微笑むカツさんに、「はい」とあたしも笑顔で返す。
「いや別にテンカワさんのことを考えていたわけじゃないですけど」
あたしが考えていたのは先日のショーリン君の言葉だ。
マケンドーを信じるなと言ったショーリン君の言葉の意味を考えていた。具体的なことはわかんないけど、ショーリン君はマケンドーが犯した失敗を許せないんだろう。信じるに値しないとかちょっと言いすぎなんじゃとも思ったけど、…あたしは結局マケンドーを信頼しているのだろうか？
「失敗を恐れるな、もしつまづいてもそこから立ち直ればいい。確実に踏み進めることを考えろ。最初からぶっちぎりで強い者などない。チャンピオンのテンカワにしてもそうだろう。お前も上を目指

せる可能性はあるのだからな」
きっと、ショーリン君とマケンドーは考え方が違いすぎるんだろうな。マケンドーのその言葉を聞いてあたしはそう思った。
「わかってるよ、じゃあ行ってくる」

一個人として、マケンドーのこと信頼しているかどうかは置いといて、レースに関してなら、あたしはマケンドーを信頼しているのだろう。じゃなきゃ、こうして走ることなんてできやしない。

若草の郊外にある霊園。そこにマケンドーはいた。
その日は彼にとっては特別な日だった。公務は午前中で切り上げて、その日は欠かさずある者の墓前へと参っていた。線香と花を添え、静かに手を合わせる。
そこに眠るは、マケンドーの剣の師であり、実際は剣だけに留まらず彼の人生の師でもあった。元軍人であり厳しい環境に常に身を置き生きてきた師。彼には優しさなど欠片もなかった。常に厳しく、鋭く研がれた刀の刃のような人間だった。眉間にしわ寄せ、恐いと思われるような人相で、身内ですら近寄りがたいような人だった。
マケンドーがカクバヤシ家の人間であっても、特別扱いなどなく、非情なまでに厳しく冷たく指導してきた。
この世を去ってもう七年は経つ。この世から去っても、彼は強く生きていた、マケンドーの心の中に。
「師匠、…俺は少しでもあなたに認めてもらえる人間になれたのでしょうか？」
物言わぬ墓石へと、マケンドーは一人つぶやいた。

第七話　嫌な予感、アイツのピンチ？

今日のレースも無事勝利して終了。
最近レース会場に来るのが楽しみで仕方ない。理由？　それはもちろん天使君ことアマツカ君に会えるかもしれない場所だからね。…今日は会えなかったけど、会場のどこかにいたりするんだろうか？
　ああでもあの時もたまたまって言ってたから、またここで会えるとは限らないだろうけど。うん、予感っていうの？　感じるんだよね。
駐車場へと続く通路を歩いている最中に、突然マケンドーがピタリと立ち止まった。
「カツ、カケリを連れて先に戻ってくれるか？」
マケンドーの発言にカツさん少し驚いていた。なにも打ち合わせてなかったみたいで。
「心配するな、野暮用だ。かまわず戻ってくれ」
「は、はい。ではまいりましょうか、カケリ様」
マケンドーとカツさんそれぞれ背を向けて歩き出す。カツさん、ちょっと心配そうな表情に見えた。なんなんだろ？でもあたしは特に気にせず、カツさんとそのまま屋敷へと戻った。
まさか、あんなことになるなんて、想像もつかなかったからね。

カツやカケリたちとは反対方向へと向かうマケンドー。
「コソコソと最近俺の周りを探っていたのはお前か？」
誰もいない通路、コンクリの壁にマケンドーの声だけが響く。
鉄の管の向こう、ゆらりと人影が動いた。それをマケンドーは見逃さない。
「待て！」
追いかける。逃げるのは少年だ。最初は距離を離されるばかりだっ

たが、突然少年は「うっ」と呻いて足を縺れさせスピードを落とした。そのすきにマケンドーが距離を詰める。
「お前、足を痛めているのか？」
膝を押さえながら体を起こす少年を見て、マケンドーが訊ねる。
「待て、逃すか」
片足を壁のようにして少年の前に出し、マケンドーが行き手を遮る。
「お前、何者だ？　どこの回し者だ？」
「ごめん」
小さくそうつぶやいて、少年は素早く後ろ向きに飛んで、マケンドーから逃れる。
「待て」
振り返るマケンドーは、今度は別の人間にその行き手を遮られた。
「カクバヤシ・マケンドー、悪いが少し付き合ってもらおう」
「！？　なに」
ズラリと屈強な男たちにマケンドーは囲まれていた。
「人質もおさえてある。抵抗はお互いのためにならない」
「（人質？　まさかカケリたちが？！）」
ギリッと悔しそうに歯噛みしながら、マケンドーは男たちに従った。

「ゲ、兄上！？」
マケンドーは地下の狭い一室へと連れてこられた。そこで彼を目にして驚きの声を上げたのは見知った相手だった。なぜお前が？と互いに怪訝な顔で見やる。
「ショーリン、お前がなぜここに」
背後の唯一の出入り口が閉められ、ガチリと鍵がかけられる音が響いた。
そのことよりも目の前の弟を見据える。
より不満そうな顔をしているのはショーリンのほうだった。
「ちっ不意打ちとか、男のすることじゃねーよ、卑怯者のくそった

れどもが」
「ふ、不意打ちでやられたのか、情けないやつだな」
「なんだと？！」
カッと血が上り、ショーリンがマケンドーの胸元に掴みかかる。
「少し落ち着け。お前までなぜここに連れてこられた？連中は何者だ？心当たりはあるのか」
ぎゅっと唇を噛みながら、ショーリンは掴んでいた手を離す。
「さあ、知らないよ。兄上にこそ心当たりがあるんじゃないか？いっぱい敵いるみたいだしさ。とんだとばっちりだよ」
心当たり、…あるとすれば。
カクバヤシ家に恨みでもあるのか、それとも。
あの少年は何者だったのか。最近自分の周りを探られていたことにマケンドーは気づいていた。
カクバヤシに強い恨みを持つ者か…。心当たり、あるにはあるが、確証はまだない。

帰宅して、あたしを下ろしてからカツさんは慌しく出駆けて行った。いつも落ち着いたカツさんにしてはめずらしいなと思っていた。それでもあたしはその時さほど気に止めないで、いつものように食事して眠って、朝起きたらいつものようにトレーニングルームでモリオカさんとトレーニングをやっていた。
その日もそのまま終って、終るだろうと思っていた。マケンドーとその周辺で大変なことになってたなんて、思いもしなくて。
朝から忙しなく携帯で連絡を取っているカツさんが目についた。マケンドー、見てないな。ふと気になってカツさんに聞いてみた。
「マケンドー様のことなら心配ありません。カケリ様はご自分のことに集中されてください」
にこり、と笑顔でカツさんはそう答えたけど、あれ、なんだろう。

変な感じだ、こういうのって、あれだ。
胸がざわつくっていうの？嫌な予感って言うの？そんな感じ。

「はー、よりによって密室で一緒に閉じ込められたのが兄上なんてさ。…どうせならカケリちゃんと閉じ込められたいよ。おれの姿が見えなくて今頃心配させちゃってるかもなぁ」
「安心しろ、それはないだろうからな」
「へぇそうかな？　兄上のほうこそ心配されてないんじゃないの？むしろ、いなくなってせいせいしているだろうね」
「……」
「あれ？　もしかしてちょっとショックうけてたりするの？　兄上もしかして、カケリちゃんのこと結構本気だったりするんだ？」
「うるさい、少し黙っていろ。ムダに体力消耗するな」
ちっ、舌打ちしてショーリンは冷たい壁にもたれる。
誘拐されて、二人してこの狭くて冷たい密室に閉じ込められて、何時間が経過しただろうか。険悪な兄弟が嫌でも二人っきりにさせられて、衝突をさけるほうが困難だった。イラついていたのは弟のショーリンのほうだった。よほど兄のマケンドーと一緒にいるのが不快らしい。
マケンドーにも焦りがないわけはなかったが、ショーリンほど乱れてはいなかった。不思議と精神に余裕を持てた。昔しごいてくれた師匠のおかげかもしれない。
それにカクバヤシの人間が二人も行方不明になれば、気づくものは多数いるだろう。マケンドーの場合はカツが上手く立ち回ってくれているだろうという安心があった。が長くこんなところで閉じ込められているわけにはいかない。
「連中に付き合ってやるとするか？」
「はぁ？」

敵を探る。その心でマケンドーは連中の動きを待った。謎の男たちは顔を覆面で隠し、屈強な体で威圧してくる。
「来い」
乱暴に連れられ、腕を縛られ目隠しをされた。別の部屋へとマケンドーだけが連れて行かれた。こんな状況でもマケンドーはパニックを起こさなかった。感覚を研ぎ澄まして、連中が何者なのか？なにが目的なのかを探ろうとする。

一人部屋に残されたショーリンの元にも、迎えの男たちが現れた。警戒の構えをとるショーリンに対して、男の一人が携帯電話を目の前に差し出してきた。怪訝な顔を崩さないショーリンだが、男に電話に出るように言われ手に取る。
電話の声は自分が知る相手だった。その相手に驚きの声を上げた。
「ユキちゃん？！」
『ショーリン君？　大丈夫？　あのね、すぐに帰してもらえる様に、手配してもらったから、だから大丈夫だから、安心して』
付き合いのある青原市出身のアイドルの少女、ミナミ・ユキの声だった。彼女はショーリンの数多くいるガールフレンドの一人になる。まさかの相手にショーリンは驚きを隠せない。
「待って！　今回の件、まさかユキちゃんが関係してるの？」
『違うの！　ショーリン君と急に連絡取れなくなって、心配して、事務所の社長に相談してなんとかしてくれるってことになって。学校のほうにも対応済みだから。今回の事は忘れてほしいって』
「なにそれ？話が全然見えない、どういうこと？　そっちの業界が絡んでるってこと？」
『違う、そうじゃなくて、あの…ごめんね、私もよく知らなくて、それに話しちゃだめだって言われて』
言葉途切れ途切れに嗚咽が混じるのを聞いて、ショーリンも彼女の心情を察する。

「ごめん、わかったなにも聞かない。じゃあおれは無事にここから帰れるんだね」
電源を切り、男に電話を返す。そのまま男たちに連れられショーリンは部屋を出た。

ショーリンはあっさりと帰された。がマケンドーだけはそうはいかなかった。元々連中の目的はマケンドーでしかなかったようだ。ショーリンは人質という名目で連れられてきたようだった。
「くっっ」
皮を打つ音が室内に響き、マケンドーのうめき声が零れる。体の自由を奪われ、視覚も奪われた状態で、肉体を痛めつけられている。ひゅっと空を切る音がして、それがマケンドーの体を打ち続ける。衣服は乱れ、皮膚は痛み、赤い染みがじわりと広がる。打たれるたびに体がゆれ、汗や血といった体液の雫が舞った。
「そろそろ我慢の限界ではないのか？　早く返事をしないと気を失うぞ」
暴力を振るう男の声、がマケンドーは男の言う返事とやらはまだしていない、するつもりもないようだ。目隠しをされたままの顔でにやりと不敵に笑う。
「ふ、この程度で俺が屈すると思ったか？残念だが、お前らの望みどおりには動かん」
「やれやれ、まだ足りないようだ」
びゅっ、鋭い空きり音がして、直後マケンドーを激しい痛みの打撃が襲う。
「ぐぅっっ」
これしきなんてことない！マケンドーは心でつぶやく。なんてことはない、師匠のしごきに比べたら痒いものだ。思い出しながらマケンドーの顔には笑みが浮かぶ。痛みに苦しみもがく姿を見せはしない。そのマケンドーの姿に歯がゆく思うのは、目の前にいるマケンドーを痛めつけている男…ではなく、隠しカメラのモニターの向こ

う側にてここの様子を眺めていたある男だった。
「気にいらん。どうすれば這い蹲る？」
ぎりっと歯軋りして、憎々しげにモニターに映る痛々しいマケンドーを睨みつける。
男の携帯の呼び出し音が鳴り響く。着信を見ずとも相手はわかる。
通話ボタンを押し、出る。
「どうした？」
不機嫌を隠さない低い声で通話する。
『秘書の男が動いています。すぐに感づかれるかも』
チッと男の口から舌打ちが漏れる。通話相手は声の感じからして若そうな男の声だ。この男の部下の者だろうか。
「カツとかいう男か。足止めして時間をかせいでおけ」
『……』
「どうした、返事は？」
『はい…わかりました』
ぴっ。通話を切り、男は再びチッと舌打つ。
「かわいげのない犬め」

トレーニングを終えて、あたしは部屋へと戻った。食事を済ませて、入浴で体を休めながら、ずっと気になっているのはマケンドーのこと、そしてカツさんのこと。
心配いらないって言われたけど、マケンドーの姿あれから一度も見ていない。マケンドーがいないこともあってカツさんいつも以上に忙しそうにしていたし、邪魔はできないし。
だけど…
「だいじょうぶ、なのかなぁ…」
ベッドに腰掛けながら、声だけでもかけに行こうかななんて考え出した頃、室内の電話が鳴った。こんな状況だからかなりびくって驚いて、あたしは受話器を取る。

『カケリちゃん？　おれだけど…』
「ショーリン君！？　こんな時間にどうしたの？」
なんだろう、なんか妙に心臓がばくついてる。ショーリン君の用事ってなんなんだろ？
『あー、うん、その、さ…』
電話の向こうのショーリン君の声のトーンがいつも以上に低くて、だからか余計に不安な気持ちが増していくんだけど。
「なに？　ショーリン君なにかあったの？」
『カケリちゃんおれのこと、心配してた？』
「へ？…なんで？」
『…ちょっと前までおれ、監禁されててさ』
え？　なにさらっととんでもないこと言わなかった？ショーリン君。
「か、監禁って？　大丈夫だったの？」
『まあなんとか、おれのほうは…』
後半言葉を濁すショーリン君、まさか？
「マケンドーも一緒に？！」
『…まあね、でもさすがに命の危険とかはないと思うし』
「待って！　すぐカツさんに伝えなくちゃ」
あたしは急いでカツさんのもとに走った。
「カツさん！　マケンドーが！」
マケンドーの名前を耳にしたとたん、カツさん素早く反応した。
「マケンドー様が見つかったんですか？！」
「う、うん、あたしが…じゃなくてショーリン君から」
「ありがとうございます！　すぐに迎えにいきます」
カツさん身支度も整えないで、そのままで車のほうへと走って出て行った。
大丈夫、なのかな。もうこんな時間だし…、明日はレースだし、ちゃんと間に合うよね？
このまま部屋に戻って休むべきか、それともカツさんについていくべきか。急にその選択肢で迷って。たぶんここは、カツさんにまか

せて、あたしは戻るべきなんだろうけど…。
だめだ、まだ不安な気持ちが晴れないままだ。なにもないだろうってショーリン君言ってたみたいだったけど…、だけど、監禁されていたなんて、なんかただ事じゃないんじゃないの？
迷いながらもあたしの足は駐車場のほうへと動いていた。
「カケリ！」
屋敷を出てすぐに、あたしを呼び止めたその声は。驚いて目を見開く、どうしてここにいるの？
「アマツカ君！？」
暗がりの中、うっすらと浮かび上がってくる顔。偶然もここまで続くともう運命と断定せざるをえないかもと、いや、そんなときめいている状況でもないんだけど。カツさんを追いかけなきゃと思う気持ちと、アマツカ君と話したい気持ちとで新たな迷いが生まれる。
「カケリ、お願い。あの人を止めて」
「え？」
あの人ってカツさんのこと？
アマツカ君の真剣な眼差しはカツさんのことを心配してくれているようだった。もしかして、カツさんの身に危険が？
「うん、わかった。ありがとうアマツカ君！」
結果あたしの迷いは晴れた。アマツカ君が晴らしてくれた。裸足になってカツさんを追いかけた。
ちょうど車を発進する前だった。
「カツさん！」
「カケリ様？！どうし…」「あたしも一緒に行かせて！」
一瞬驚きの顔を見せたけど、カツさんにこりと頷いてドアロックを解除してくれた。

マケンドーを捕らえている男たちの元に一つの指示が届いた。
撤収の指示だった。五分も経たない間に男たちは皆姿を消した。マ

ケンドーは担がれ別の場所へと運ばれた。意識は朦朧としていた。どこへ連れて行かれるのかも見当がつかず。完全に意識を失い、冷たい壁にもたれやがて冷たい土の上に倒れこんだ。

「…う、ここは」

痛みがビシビシと走る。目隠しを外すと、そこはまだ暗闇で。屋外にいた。空はすっかり闇色だ。数メートル先に地面を照らす灯りがあった。どこかの公園の公衆便所のすぐわきに倒れていた。気を失っている間に移動させられたのだろう。まるで狐に化かされた様な状態だが、走る痛みは現実にあったことなのだと証明している。あの謎の男たちは存在すらもう近くに感じない。なにが目的だったのか？

こんなところで考え込んでいても時間の無駄だ。マケンドーは体を起こし、カツと連絡の取れるところまで移動する。

移動中にカツさんの携帯が鳴って、それがマケンドーからだった。公園の近くで、一人立っているマケンドーを見つけた。

「マケンドー様！　ご無事ですか？！」

カツさんがマケンドーに駆け寄る。あたしもカツさんと一緒にアイツのそばへ。

「ああこの通り生きている」

そんなこと言われなくてもみりゃわかる！　カツさんが聞きたいのはそんなことじゃないでしょ。

「カツさん本当に心配していたんだからね！　一体今までどこにいたのよ！？」

「悪かったな、お前にも心配かけたか」

「は？　べっ別にあたしはマケンドーのことなんて心配してないし、ほら、なんかあったらうちの親金の亡者だから、いろいろとめんどうっていうか、あたしも自由になりたいし」

心配くらいするっつーの、こんな奴でもなにかあったら気分悪いし、

人として！
「俺はカツを信じている、カツも俺を信じてくれている、だから心配などない」
カツさんとマケンドー、二人の絆は簡単に切れないし計れない…のかな。
「こんなところで長話している暇はないだろう。戻るぞ」
ささくさと車へと向かうマケンドー。監禁されていたって聞いたのに、何事もなかったかのように振舞って…、たいしたことなかったのかな、ならいいけど。
「明日はレースだからな、準備にぬかりはないだろうな？」
やっぱりマケンドーはマケンドーだ。監禁されている間もずっとレースのことでも考えていたんだろうな。ほんと、変に心配して損したよ。
あ！？　そういえばアマツカ君、どうしてあんなところにいたんだろう？　それにカツさんのこと知っていた？
アマツカ君のこと気になっていたけど、屋敷に戻って注意深く探してみたけどそれらしき人はもう見当たらなかった。マケンドーかカツさんの関係者だったりするのかな？　でもだったら、もっと堂々と会えてもよさげなんだけどな。まあ、会えるよね？　また近いうちに、そう信じているからね。

カケリが想うアマツカは、ある邸内にいた。カクバヤシの別邸に負けず劣らずの剛健で豪勢な邸内は、権力者の象徴とも言える。通路を歩くアマツカの表情は、無表情に近かったが、どこか沈んでいるようにも見えた。
「おかえりなさい」
前方から聞こえてきたその声へと反応するように、アマツカは顔を上げた。前方より自分を迎えてくれたのは無表情に近い顔をしつつも、わずかに笑みを見せてくれた少女。

「ただいま、テンカワ」
アマツカがテンカワと呼ぶのは、あのテンカワだ。中央東の馬、鋼鉄の天使ともてはやされているチャンピオン…テンカワ・ワタル。
「ねぇ、…大丈夫なの？　体の具合悪くは」
テンカワはアマツカの顔をのぞきこむ。純粋に彼を思いやる表情で。
「大丈夫だよ。全然なんともないよ」
優しい笑顔で答えるアマツカ。それにテンカワは「そう」と小さく答えた。自分の横を通り過ぎ、彼は向かう。
「待って！」
振り返って呼び止める。普段大人しい彼女にしてはめずらしく語尾が強まる。
「あの方に報告に行かなくちゃ。テンカワはゆっくり休んでなきゃだめだよ。明日はレースなんだから。油断できない相手だから」
「ねぇ、もう…」
必死の眼差しの向こうにある彼女の想いを、アマツカは痛いほどわかっていた。それでも、止まるわけには行かない。アマツカにはアマツカの譲れない想いがあるから。
誰の制止だろうが、振り切る。強い決意で、アマツカはそこへと向かう。

「酷い…、マケンドー様、痛みは？」
自室に戻り、上半身裸のマケンドーの体を見たカツが、痛々しい姿に顔を歪める。生々しい傷跡が彼の体に刻まれていた。「平気だ」とは言うが、その額には脂汗が浮いている。簡単な手当てをして、痛み止めを打ったが、とても平気に見える状態ではなかった。
「明日はレースだ。治療など後回しでかまわん。それに、職務もたまってしまったしな。傷など時が治してくれる」
弱音は吐かない、けして。マケンドーの根底にあるのは亡き師匠の教えだった。心配ははれていないが、ひとまずカツは安堵する。

「で、連中についてわかったのか？」
「ええ、証拠はつかめてはいませんが、思い当たるのは…」
「少なくとも、犬の顔は覚えた」
マケンドーがなにもない空間を見つめながら、目を細める。そこに思い描くは自分の周りを探っていたあの少年の顔。カケリが運命の相手だと思い込んでいる、謎の美少年アマツカと瓜二つだった。

第八話　ついに敗北?、二つのショック

遡る事十数年前。現在の中央東区北東に位置する閑静な町。そこにあった児童養護施設その名も【天使園】には十数人の子供達が当時身を置いていた。

ワタルという少女もその施設で世話になっていた。同施設で兄弟のように仲良くしていたツバサという少年もいた。初老の園長を中心に、施設は家族のような穏やかな関係を保っていた。

当時はここの地域は中央東ではなく、天使(あまつか)区という小さな区であった。現在は吸収合併という形で天使区の名前はなくなってしまったが。

施設の後援者でもあった地主のテンカワ・コウロウの働きにより、天使園の子供達の生活は守られていた。が園はある件がきっかけで閉園せざるをえなくなってしまう。園内の子供達が次々と謎の奇病にかかってしまったのだ。当初は食中毒や感染症を疑われたが、どうも違っていた。病にかかる子供達には個々によって時間差があり、数年後に発症した子もいたのだ。未知の病でまだ名前のなかったその病には、皮肉にもその施設…つまり施設の名の由来にもなっている天使区からとられ、天使病【てんしびょう】と名づけられた。

天使病とは…、急死にかかわる病ではない。また感染に関して、成人には感染はしない。が子供に感染する確証もない。さらに青原市どころか全国でもまったく例のない病だった。症状が出たのは、天使園の子供達数名。ただ中には完治したという情報もある。がこれもちゃんとした記録は残されていない。

天使病の症状は、少しずつゆっくりと進行していく。つま先から壊死が始まるのだ。壊死をとめる術はなく、切断という道を選ぶ。

閉園後、子供達の面倒を見たのがテンカワ夫妻だった。子供達はそれぞれ里親の元に。ワタルとツバサはテンカワ夫妻の養子として引き取られた。施設で兄妹のように育った二人は、テンカワ夫妻の元

で、兄妹として育つことになる。幸いにもツバサとワタルには天使病の症状はこのとき現れなかった。
テンカワ夫妻は子宝に恵まれる事がなかったため、養子の二人だけが彼らの子供だった。資産家として財産と地位には恵まれたが、子宝には縁がなかった。そのこともあり、ツバサとワタルを実の子のように愛情を注いで二人を育てた。親の愛を知らなかったツバサとワタルにとっても、テンカワ夫妻は実の親のように思える存在へとなっていった。が、彼ら家族の幸せは突如終わりを迎える。
悲惨な交通事故。テンカワ夫妻の車に暴走車が正面衝突し、激しいクラッシュ事故で車体は大破。夫妻は即死だった。また後部座席に乗っていた長男のツバサも事故の犠牲者となった。唯一、車に乗っていなかったワタルだけが幸いにも生き残った。いや、一瞬にして初めての家族を一気に失ったのだ、これ以上の不幸などあるまい。
この事故を機に、ワタルの周囲も一変する。天涯孤独となった少女ワタルの後継人となったのが、オオガワラ・ギゾウという名の男だった。オオガワラ・ギゾウはかつて国政に身を置いていたオオガワラ・チョウゾウの息子である。チョウゾウは国政のトップの地位にまで上り詰めたが汚職をきっかけに転落。代々国政議員に名を連ねてきたオオガワラ家の名はチョウゾウで途切れたのだ。が、政の世界からオオガワラの名は消えてはいなかった。それがこの男オオガワラ・ギゾウだ。青原市の中央東区の区長に就任し、彼が区長となってから中央東区は右肩のぼりに成長を続けた。区の発展に力を入れ、天使区との吸収合併も彼の成し遂げた事だ。
野心の塊のようなこの男の力が、中央東区を大きく、強くさせた。当然レースにおいても、彼は豪腕を奮った。鋼鉄の義足が特徴である彼の馬は常にチャンピオンの座に着いた。現チャンピオンのテンカワ・ワタルもその一人だ。
施設で育ち、資産家の養子となり、そして中央東区の馬となった。テンカワ・ワタル…彼女の十六年の人生はなかなかに波乱万丈な人生かもしれない。

「調子、だいじょうぶ？」
椅子に腰掛け一息ついていたテンカワに、そう声をかけてきた相手は彼だ…アマツカ。カツカツと足音は近づいて、テンカワのすぐ傍でしゃがみこむ。
「うん。…ちょっと、最近違和感が…伝えてはいるんだけど」
不安を感じさせるニュアンスでテンカワがつぶやく。冷たい鋼鉄の足をさする。接触部である膝の辺りに触れながら。
「そっか。…ボクからも伝えてみるよ」
すくっと立ち上がりながら、アマツカはテンカワへと優しく微笑む。彼の笑顔を見るたび、テンカワは胸の奥がぎゅうと締め付けられる気持ちになる。心が痛む。
「待ってアマツカ、いかないで、あの人のところには…」
もう傷つかないでと、心で叫ぶ。その想いはとっくに彼に届いているはずなのに、彼はアマツカはテンカワの想いをきいてはくれない。
「だいじょうぶだから」
いつもそう言って。アマツカは行ってしまう。その行き先で彼がどんな目に合うかわかっているのに。いつも彼は笑顔で向かうのだ。自らが傷つく道へと。

ドアをノックする前に、アマツカは息を飲み込む。何度対面しても慣れない。この緊張感、何度対話しても通じ合える気がしない、その相手。だけど、自分はその人から離れる事はできない。己に科した枷。
「入れ」
低く響く中年男性の声。「失礼します」とアマツカはドアを押し開け入る。
恰幅のいい背広姿の男。白いメッシュの入った髪をぎっちりとオールバックでそろえている。一重のやや腫れぼったい瞼の下の眼光はぎらつくように鋭い。

オオガワラ・ギゾウ、中央東区の区長である。
アマツカとギゾウの関係は、一言では語りきれない、そういう関係だ。二人の間に、情といったものは感じられない。
アマツカはただ黙って、ギゾウの言葉を待つ。
「若草の馬をつぶせ」
冷酷なギゾウの指令に、アマツカはぴくりと体を震わせる。若草の馬…つまりはカケリの顔が浮かぶ。
強張るアマツカを見ながら、くくくとギゾウはのどを鳴らして笑う。物騒な想像をするなと。
「なにも物理的にという話ではないぞ。すでに顔見知りになっとるのだろう？　種はすでにお前自身が蒔いたはずだ」
にやり。ギゾウがいやらしく口元を歪める。その指令にアマツカは少しほっとした。できることなら傷つけたくは無いから、彼女を…カケリを。

「アマツカ君…」
部屋の窓から外を眺める。カクバヤシ別邸の庭園を見下ろす。あたしが探すのはもちろん彼だ…アマツカ君。
あの時、あの当たりで見たんだよね。マケンドーを探しに行く時に。アマツカ君、どうしてあそこにいたんだろう？　ここで働いている人ってわけでもなさげだし、…マケンドーの知り合い？　まさかね、そんな…。
「ゴラァアア！　窓全開開けっぱにすんなつったろーがーーゴミが入るっつーんじゃこんちきしょーが！」
背後から響く怒声はヒヨコさん。
この距離なのに耳がキンキンになる。慌ててあたしは窓を閉めた。未練がましく視線は窓の外に向かっちゃうけど。
こっそりと邸内を探して歩く。アマツカ君、どこかにいないかな。
通路をこそこそと歩いていると、聞き覚えのある声につい足を止め

る。
「兄上がどうなろうがどうでもいいけどさ、おれや周辺まで巻き込むなってことだよ！」
ショーリン君の声だ。言い争っている相手は、つまりマケンドーだ。一体なんの話してるんだろ。つい気になってそそと聞き耳を立ててしまう。
「お前も分別わかっておかしくない年だろう。自分の交友関係にはもう少し慎重になるべきだな。それが弱みに繋がる事になる」
「おれの交友関係にまで口出ししてほしくないな。…ああそっか、自分がそうなんだ？　だから兄上はカケリちゃんに手が出せないってことだよね？」
は？　どういうこと？　ショーリン君なんの話してるの？
急に会話の中にあたしの名前が登場して、どきってなる。
「この際だはっきりと教えてよ。兄上カケリちゃんのことマジで好きなの？」
は？　はあーー？！
「お前はすぐにそういうことに結び付けたがるな。俺は公人だ、そういった感情で動きはしない」
「職業なんて関係ないだろ？　人間ならあって当然の感情なんだから。必死で誤魔化しているだけなんだろ？　兄上は怖いんだ、完璧じゃないから。道を踏み外すことが、カケリちゃんにふられることが！　隠し通せば負け犬にならないとでも思ってるんじゃないのか？」
「ショーリン、お前はやはり俺をわかってはいないな。失敗を恐れているのはお前のほうだろ」
「なっなんだと？！」
カァッと血が上ったショーリン君がマケンドーに掴みかかって、やばい今にも殴り合いが始まりそうな空気に、あたしは飛びだしそうになったけど、カツさんが駆け寄ってくるのが見えて飛び出さずにすんだ。ショーリン君はマケンドーから離れて、憎々しげに睨み付

けてから出て行った。ほんと、仲悪い兄弟だなあの二人。
「マケンドー様…」
「気にするなカツ、いつものことだ。アイツは俺と兄上を比べているようで、自分と兄上を比べてしまってるんだろう、意識していないところでな。今回の件アイツも無用心すぎた。反省してもらわねばな」
「マケンドー様、例の件、カケリ様にお伝えしたほうがよろしいのでは」
？なんだろ、例の件って。

夕食後にマケンドーに呼ばれた。
「カケリ話がある。食事がすんだら俺の部屋に来い」
な、なんだろ、話って。まさか…まさか？！
「うぐっっ、げほげほ」
うっかり芋の煮物を飲み込んでしまってむせ返ってしまった。ヒヨコさんが睨んできたけど不可抗力だから！　だってマケンドーが話があるなんて言ってくるんだもの。なんだよ話って、まさか。
さっきのショーリン君との話をリピートしてしまう。
話ってまさか？
『兄上カケリちゃんのことマジで好きなの？』
「ないないない！」
マケンドーの部屋の扉の前で、あたしは否定するように首を振る。
いやだって、ありえないし、マケンドーがあたしを好きになるとかそんな理由が見当たらないし。そんなわけないし。
カツさんも意味深な事言ってたし、いやでもだからって、そうだって決め付けるのは短絡すぎるし、第一、理由が思い当たらない。だから、絶対ない！
「いるのか？」
「いっ？！」
扉の向こうからマケンドーに呼びかけられて、あたしは変な声出し

ちゃったじゃないか。あんたはエスパーか？
さきほどまでの考えをリセットするようにあたしは頭をぺちぺちと叩いて、部屋へと入った。
暖色系の電灯が妙な雰囲気で、余計に緊張するじゃないか。
「な、なに？　話って？」
平静をよそおいながらもきっと引きつっているあたしとは対照的にマケンドーは落ち着いてて、なんかそれが妙に恥ずかしい、じゃなくて腹立たしい。
「とりあえず座れ」
マケンドーの真向かいにある椅子に座れと指示された。そのままあたしは座るけど、あ、なにこれこの雰囲気、先生との個人面談みたいだ。
「カケリ」
真正面に座るマケンドーの真剣な眼差し、瞳の奥までのぞかれそうで、こういうの、苦手だ。告白される瞬間ってこんな感じなのかな？　だめだ、すごい音がしてる。すごいどきどきしてる。どこで息していいの？　ツバ飲み込んでいいの？　瞬きしていいの？　そんな普段意識しないことがすごい気になってる。時計のカチカチ音だけがやけに響いて、それが心臓の音とリンクする。異次元に飛ばされるみたい。
「な、なに？！」
飲まれちゃだめだ！　理性がシールドはらなきゃって、気持ちを強くしなきゃと声をはる。
「お前に確かめたいことがある」
静かな部屋の中マケンドーの声が響いて、時計の秒針の音と、あたしの体の中の音だけが、きっとそれだけはあたしにしか聞こえていないはずだけど、妙にうるさくて、どうにかなりそうだ。
確かめたい事って？まさか、まさかあたしの気持ち？
真剣な目で見つめられて、あたしは平静をよそおいながら、中ではどきどき鳴りっぱなしで。どうかしてるよ、マケンドーは嫌な奴で、

そんなマケンドーにどきどきするなんて、あたしはドMじゃない。
「はっ」
？！
急にマケンドーが息を飲み込んで、立ち上がったかと思うと、あたしの両肩を掴んできた。
「えっちょっまっっ」
待ってが言えなくて、あたしは完全に体が固まる。ウソ、キスされる？！
「カケリ動くな」
う、動きたくても動けない。やだどうしよう、こんな、こんな展開聞いてないし。あたしが好きなのはアマツカ君で、初めての告白もキスもアマツカ君がいい！
「何者だ？　出て来い」
「へ？　え？」
マケンドーの声はあたしでない別の誰かに向けて発せられたものだった。固く閉じていた目を開けるとマケンドーの顔は近くにあってびくってなったけど、マケンドーの目はあたしじゃなくて別の方向に向けられていた。
部屋の隅、本棚の横のデッドスペースで影が揺れた。
だ、だれかいる？！
マケンドーがあたしの肩を押して、あたしの前に立つ。謎の影のほうを睨みながら。
「な、なに？！」
影は動いて、ドアのほうへと向かう。灯りの下でその顔がハッキリと見えた。あたしは我が目を疑う。
「アマツカ君？」
確実に目があった。アマツカ君もあたしを見ていた。どういうこと？　頭が爆発しそう。
アマツカ君はなにも言わないで、ドアから出ようとした。
「待て」

マケンドーがアマツカ君のほうへと走る。
「待って！」
あたしは反射的にマケンドーの体を掴んで、動きを止める。
そのすきに、アマツカ君は素早くドアを開け、飛び出す。
「おい、カケリ離せ、アイツは」
「あたしが追いかける！」
靴を脱ぎ捨て、あたしは部屋を飛び出した。アマツカ君を追いかける。なにも考えないで、ただあの背中を追いかけて、捕まえる。
「アマツカ君！」
裏戸の直前で、あたしはアマツカ君の肩を掴んだ。振り返るアマツカ君。間違いない、この顔はアマツカ君だ。また会えた。
「カケリ、ごめん…」
「へ？」
かすかにその顔は切なく歪んだように見えて、あたしの手を振り解いたアマツカ君の手が、あたしの体をドンと押した。倒れる。それがわかっているのに、それを何度も考える余裕もあるのに、あたしの体はまた固まって、そのまま弾かれるままに後ろに倒れこむ。走り去るアマツカ君の背中を止める事もできないまま。
「カケリーー！」
後ろからマケンドーの声が近づいてきているのを感じながら、あたしは気を失った。

次にあたしが見た景色は、自室の天井で…マケンドーの顔だった。
「カケリ！　気づいたか」
「マケンドー？　あたし…」
あれ？　そういえばなんでここに？
「お体も大事ないようでよかったです」
すぐ傍にカツさんもいた。
あ…そうか、あたし気失ったのか。あ、なんか体痛いかも。

「俺の不注意だ。傍にいながら、こんなことに」
すまないと言うマケンドーの言葉を、あたしはかき消そうとする。否定したいから。違う、彼のせいじゃない、アマツカ君はなにもしてないと。
「なんでもない、あたしが走ってこけただけだから」
「カケリ、アイツがだれか知っているのか？　アイツは」
「アマツカ君は」
「中央東の犬だ」
「え？　なに…？」
マケンドーの言った意味がわからず、あたしの思考は停止する。なに？　どういうこと？　マケンドーはアマツカ君のこと知ってるの？
「アマツカと名乗っているようですね」
「え？」
カツさんも知ってるの？
「カケリ、お前アイツと以前にも会った事があるのだな？」
う、ついにマケンドーにも知られてしまった。アマツカ君とのこと。
「アマツカ君は悪い人じゃない」
「先にも言ったろう、アイツは中央東の犬だ。おそらく、オオガワラの差し金だ」
言ってる意味がわからない。
「アマツカ君は犬じゃない！　アマツカ君は天使なんだ！」
「カケリ？　お前なにを。…少し落ち着け！」
「うるさい！　マケンドーのバカー！」
「く、動揺するな！　お前は若草の馬だ」
その前に一人の女の子だ！
「だがこれでハッキリしたな。オオガワラは以前からあのアマツカという小僧をけしかけてきていた。
カケリ、もう二度とあのアマツカには近づくな、いいな」
頭の中ぐるぐるする。だけど、マケンドーのそれにあたしは応えることはできない。やっぱりあたしはアマツカ君を信じたい。みんな

がダメだと言っても、それは譲れない想いなんだ。

アマツカは中央東のギゾウ邸にいた。ギゾウの部屋で報告をすませて、テンカワの様子を見にいく。
テンカワはトレーニングを終えた後で、義足のメンテナンスを済ませ結果待ちをしている最中だった。
「アマツカ」
入り口付近に立つアマツカに気づいたテンカワが、彼の名を呼ぶ。
「今日のトレーニングは終ったみたいだね、お疲れ様。明日はレースだし、ゆっくり休めないとね」
「明日の相手は…」
「うん、聞いてる。テンカワも聞いてるんでしょ？」
こくりとテンカワが頷く。
「大丈夫だよ。テンカワは負けない。…だれが相手でも」
「それは…」
裏でアマツカが動いているから。ギゾウの命を受けて、良心に反することをさせられている。けして負けるわけにはいかないギゾウは、完璧な勝利を得るために、裏でいろいろな工作をしている。直接聞いているわけではないが、テンカワは知っていた。心優しいアマツカが、そのことで傷ついている。表には現さないし、自分にもけしてその弱さをさらさないけれど。
勝つことを使命として、負けるわけにはいかないチャンピオンのテンカワ。だけど彼女にとって勝利は喜びではなく、心に重いものが積み重なる。勝つたびに、見えないところで彼はアマツカは手を汚し、心を痛めている。
なにもできない、ただ走ることしか、勝つ事しかできない。自分の非力さがつらかった。

レース開始の一時間前、マケンドーは市庁に呼ばれていた。もちろ

ん彼を呼んだのは市長コヒガシだ。相変わらず派手な出で立ちの胡散臭い風貌でマケンドーを出迎える。
元々予定になかったことで、例の市長のことだ、なにか企みがあってのことだろうと予想はついていたのだが。同席していた相手に冷静なマケンドーも思わず顔をしかめる。
「オオガワラ区長」
ふんと実際に鼻で笑ってはいないが、そんな音が聞こえてきそうな表情でマケンドーへと振り返る。オオガワラ・ギゾウも同席していた。先日の事件にギゾウが関わっていたと知っているマケンドーとしては、気分はよくない。がそんな感情をここで露わにするほどマケンドーも幼くない。すぐに気持ちを切り替え市長へと向き直る。
「市長本日は何用でしょうか？」
ずずいと身を乗り出しながら市長は楽しそうに笑いながら答える。こういう時は間違いなく、なにかを企んでいる時だ。それも市長にとって楽しいことだ。
「いきなりで悪いけど、今日のレースは一部内容を変更させてもらっていてね。カクバヤシ区長、本日の若草の対戦相手はオオガワラ区長の中央東に変更になったよ」
「？！な…」
にやりと不気味に微笑むギゾウに、マケンドーは「（そういうことか）」と心の中で納得する。
ギゾウが市長に提案したのだろう。若草との対戦を。チャンピオン中央東とはいずれ当たる予定だったが、それが早まったということだ。
「若草の好成績から考えて、時期尚早でもないと思うんだがね。どうだろうか？」
と問いかける市長だが、眼鏡の奥の瞳はノーとは言わさせない威圧を放つ。マケンドーも断る気はなかった。

今日はレースだ。会場について早々マケンドーは用事だって抜けたんだけど。レースまであと一時間もないし、大丈夫なんだろうか？
　いやマケンドーのことなんて心配している場合じゃないんだけど。ずっと考えてしまうのはアマツカ君のこと…。
どうしてアマツカ君はあんなとこにいたんだろ？　どうしてあの時「ごめん」ってあたしのこと突き飛ばしたんだろ？　なにか訳があってのことに違いないけど、アマツカ君、君は一体何者なの？
『アイツは中央東の犬だ』
マケンドーが言ってたことをあたしは否定したい。だってもしそうなら、アマツカ君はあたしの…。
頭の中でそれを否定しようとかき消す。その単語を意味を、かき消したい。
「カケリ様、どうかお気になさらないでください」
カツさんの優しい声、あたしのこと気遣ってくれてる。違うよ、あたしは気にして無いから、心配しないでカツさん。
「大丈夫ですよ、なにも気にしている事なんてありませんから、じゃっ行ってきます」
できるだけ元気に見せながら、あたしはカツさんに別れを告げて、走者の控え室へと向かう。
怪我もなかったし、トレーニングもしっかりしたし、今日だって負けるつもりないし。なにも…不安なんてない。
「アマツカ」
！？
通路で響いたその声はあたしじゃない女の子の声、聞き間違いじゃなければ「アマツカ」って言ってた。どきってなったけど、まさかあのアマツカ君のわけ。他のアマツカさんかもしれないし、なんて思いながら前を見た。
「テンカワ、大丈夫だよ…、テンカワは負けない」
聞き覚えのある声、あの横顔、アマツカ君だ。そして彼と向かい合うのは、テンカワさん！？

テンカワさんと目があった。あたしはなにも発せられないまま立ち尽くしている。どうしよう、どういうことだろう、どうしてアマツカ君とテンカワさんが一緒にいるんだろう？　二人は知り合い？
今度は、アマツカ君と目があった。少しだけこちらを向いて、確実に目があった。だけど、あたしとは逆でアマツカ君の顔に変化はない。あたしに気づいていない？　そんなことないよね？　何度か会ったし、あたしのこと知りたいって言ったし、名前だって知ってるし。この距離で、ド近眼じゃない限り気づかないなんてこと、ない。すぐに目はそらされた。あたしのことなんていなかったみたいに、テンカワさんへと向き合うアマツカ君。
「負けるはず、ないから」
アマツカ君のその言葉はテンカワさんに向かって発せられたものなのに、あたしの心にずんと重くのしかかって、つぶされそうかもしれない。
そのまま、あたしのことなんて目に入ってないみたいに、アマツカ君は奥のほうへと歩いていった。
否定していたのに、決定的になった。アマツカ君は中央東の人間で、テンカワさんの側で…、つまりは、あたしの敵…。

「――リ！　おいカケリ！」
「うっおっ」
視界が体が揺さぶられた。マケンドーだった。あたし、ぼーっとしてた。
「なに上の空になっている。しっかりしろ。今日のメニュー急遽変更だ。相手は中央東…チャンピオンテンカワだ」
「え？　え？」
「オオガワラが仕組んできた事だが、気にすることはない、お前はただ走ることに集中しろ。俺がすべての障害を排除してやる」
「ああうんわかってる」

あたしは空返事しながら、なんかもう適当に答えていた。なんかもうなにも考えていない気がする。
考えたくない。

ゲート前。馬として、あたしと一緒にテンカワさんが並ぶ。もうすぐレースが始まる。どことなく、遠い世界みたいに感じながら、ただ待っている。
「あなたが…カケリ…」
「え？」
テンカワさんに名前を呼ばれて、あたしは一瞬驚いたけど。ああそうか、別に知っててもおかしくないか。あたしは若草の馬だし、あたしの名前くらい知っててもおかしくないか。あたしは若草の馬だし、あたしもあたしのこと知って…、う、考えたくないのに。考えるな！
「ほんとうならもっとあとにあなたと当たるはずだった…」
ああそっか、急遽決まった組み合わせなんだよね。本来ならこんなに早くチャンピオンとやれるはずなかったろう、あたしもマケンドーも新人だし。
なにか言いたげな顔をしているみたいだけど、あたしは彼女と話す事がちょっと怖いと思っている。アマツカ君のこと聞くのが、知るのが怖いってことなんだろうけど。早くレース始まって終わればいいのに。
「悪く思わないで。私も…負けるわけにはいかないから」
あまり抑揚のないしゃべり方で静かな口調、だけど奥底で強い感情を感じるような。それがチャンピオンテンカワ・ワタルなのかもしれない。
『皆様長らくお待たせしました！　さて本日の第一レースは、ここでくるか！？　不動のチャンピオン中央東区鋼鉄の天使の登場だ！
　それに挑むは勢いに乗る若草の馬。若草は勢いに乗りまくってチャンピオンを超えられるのか？　それとも鋼鉄の天使の羽先にすら

触れられぬのか？
目の離せない熱い展開が期待されます！　まもなくスタートです』
アナウンスが流れて、いよいよカウントダウンが始まる。
ただ前を見据えて、ゲートが開く瞬間を待つ。

ゲートが開き、レースが始まり、あたしは素足で駆ける。
すぐに前方に背中が現れる。テンカワさんの背中だ。速い、速すぎる。光を反射する鋼鉄の足が眩しくて、まるで彼女そのものが光っているようにも錯覚する。
だめだ、かないっこない。本当の天使みたいだ。
天使だと思うと、あたしはすぐにアマツカ君を連想してしまって。
彼女の背中を支えているアマツカ君の幻が見えてきた。
だめ、やっぱり、敵うはずない。
がくん、視界がぶれる。やばい、足が縺れて、スピードがゆるむ。
どんどん距離は離されて、あたしのスピードが追いつかないのに、目の前のトラップはどんどん解除されて、道は開けていくのに、目に見えない障害に阻まれている、あたしの心は。
『ゴール！　勝者は揺ぎ無いチャンピオン中央東だーー！』
負けた。ゆるゆると足が止まる。ファンファーレはあたしじゃなくて、テンカワさんのために鳴っていた。勝者のための歓声とともに。

控え室へと続く通路で、マケンドーが待ち構えていた。強張った表情に腕組み、間違いなく説教フラグだ。
気が重い、けど、アマツカ君のこと考えなくてすむならいっそマケンドーの説教でもいいよ。
「なんだ、あの走りは」
言うと思ったマケンドーの第一声。
「勝てるわけないよ。本気出しても絶対敵わなかった」

余計な事言ったけど、どうせマケンドーにはばれていたんだ。今更誤魔化したって無意味だ。あたしは完全にあきらめて走っていた。アマツカ君がついているテンカワさんには勝てるはずないって、最初からあきらめていた。
マケンドーの足が動く、あたしのほうへと近づいて。強張った表情は崩れない。すぐそばまで来て、あたしの体も強張る。本能的にヤバイんだなって察する。ぶたれるかもしれないなと、緊張して強張る。
マケンドーはそういうの許せない性質だと思うから。説教かまして、木刀で叩いて、まあそれがマケンドーだから。
「俺を目覚めさせたのはお前だ、カケリ」
？　なにを言ってるんだ？　マケンドーの言っている意味を考えかけるけど、さっぱり不明で。予想していた言葉が来なくて、少し拍子抜けするあたしに、マケンドーの行動がさらにあたしの思考をぶっ飛ばす。
マケンドーのスーツのにおいが鼻元に。顔面にかすかな圧迫感。数秒して抱きしめられている事に気づく。
え、えええーーー？！　頭が爆発しそうで、混乱する。
顔が熱くなるまま、あたしの体はますます強張っていった。

第九話　惑う恋心？、悪魔の微笑み

だ…だめだ、眠れない…どうしてくれよう。
時計を見るとすでに深夜三時…、三時って深夜なのか早朝なのかまあ微妙な時間帯っていうの？
いや、そんなくだらないこと考えてもなかなか眠りにつけなくて、やばいどうしよう。
あたしあれからずっと、マケンドーのこと考えてる。アマツカ君のこと考えまいとは誓ったけど、だからってなんでマケンドーなの？っていう。だから…
「うがーーーっ」
両手で目の上覆ってさらに暗闇にしてみるけど、それでもギンギンにさえて眠れないよ。考えたく無いからいっそ寝たいのに。それもこれも、マケンドーがあんなことしてくるから。あんなこと、あんなことって……。

「うわわーー」
「がーーっ朝っぱらから発狂するな、気持ち悪いんじゃぼけぇーーー！！」
「あだっっ」
ばしっとまるまった新聞紙でヒヨコさんにぶたれた。そう、もう朝の六時半…。一睡もできないまま朝がきてしまった。
「あんたほんと寝起きの顔ひっっどいわね、ざまぁ」
なにがざまぁなのかはよくわかんないけど。そんなに酷い顔かな、眠れなかったし疲れてそうな顔してそうだけど。
顔洗って下に降りたら、カツさんに会った。
「カケリ様おはようございます」
「カツさん、おはよう」
「昨日はお疲れ様でした。…相手はチャンピオンでしたし、どうか

あまりお気になさらないで下さい」
昨日のレース、…テンカワさん、強かったなぁ。チャンピオンだし当然だろうけど。
「ああうん、別に気にしては」
「マケンドー様も心配されてました」
「ぶふーーっ」
「？！　カケリ様？」
カツさんの一言で昨日のあのこと思い出して、ふいちゃったじゃないか。あきらかに変だってカツさんに思われてる。
「ああえっと、な、なんでもないです。あの…カツさんちょっと変なこと聞きますけど、…マケンドーの奴実はたらしだったりするんですか？」
「え？」
「やっなんでもないです。とっごはん食べに行ってきます」
朝食の席でマケンドーに会うの憂鬱だな、だけどおなかはしっかりとごはん要求してくるし、健康体もどうかと思う。食堂に入るとマケンドーは今日早く出るのか知らないけどすでに食べ終える直前だった。あまり一緒に空間にいられないですむとわかって、あたしはほっとしている。なんか顔見づらいし。
「…おはよう」
「ああ、おはよう、…今日は早いな」
「あたしだってたまには早起きくらいするよ」
誰のせいで寝られなかったと思っているんだこんちきしょー。
「いっただきまーす」
朝ごはんおいしいな。うちにいた時はほとんど朝はインスタントとか前日スーパーの閉店間際に買った半額パンとかばっかで、こんなちゃんとした朝ごはんなんてなかったもんなー。おいしい。専属料理人がいるとかパないわ、カクバヤシ別邸。
あたしが半分も食べないうちに、マケンドーが席を立つ。
「カケリ」

「むぐっ」
「今日もトレーニングにしっかりと励めよ。手を抜いたら承知せんからな」
「わ、わかってるってば。いってらっしゃい！」
びっくりした。危うく喉にアスパラガスがひっかかるところだったよ。そのままマケンドーは出て行った。今日も区長の仕事があるんだろう。カツさんと一緒に出て行く後姿が見えた。
…なんだ、マケンドーいつもと一緒じゃん。あたしが意識しすぎていただけかな。
第一、マケンドーがあたしを好きなんてまだハッキリしてないし、そもそもショーリン君の勘違いって可能性も高いし。好かれるようなことなんてしてないし。
昨日のアレだって、実はたいした意味なんてない行為かもしれない。ホラあれだ。選手の試合後にコーチがよくやったっていう労いのハグ…みたいなさ。うん、そんな気がしてきた。…でもマケンドーってそういうことする奴だっけ？　う、あああー、なんかまた混乱してきた。
昨夜ずっとそのことでうなされて、今日も引き続きとか馬鹿馬鹿しい。

「カケリ様、元気にふるまっておられましたが、疲れている様子でした。おそらく精神的にも」
議会へと向かう車内で、運転をするカツは後部座席のマケンドーにそう伝える。
「そうか、やはりな。原因は…アイツか、アマツカ…」
流れる横の景色を眺めながら、マケンドーがつぶやく。
「なかなかに厄介な相手かもしれん。カツ、アマツカが何者か調べておいてくれ。アイツと…オオガワラの繋がりも含めてな」

中央東区オオガワラ・ギゾウ邸、テンカワは併設のトレーニングルームでトレーニングを受けていた。別室のモニタールームにアマツカはいた。同室する白衣の中年の男から受け取った書類に目をとおす。ぱらりと書類をめくるアマツカの表情は厳しい。
「やっぱり、記録も落ちている…。これ以上、あの足で走らせるのは、ムチャだ」
アマツカのそれに「ああ」と白衣の男も頷く。
「思っていた以上に早くきたな。たしかにもう限界だ、あのこの体はな。私としてもドクターストップをかけたいところだが、区長がね…」
やれやれと男が肩をすくめながら息を吐く。
「ボクから頼んでみます。テンカワをあの足から解放してもらえるように」
「君も愚かだねぇ。聞いてもらえると思うかね？　死人の頼みなど」
男の言葉にアマツカは顔色を変えることなく、答える。
「近いうちにドクターのお世話になると思います。その時は、…よろしくお願いします」
白衣の男は一瞬呆けた顔で顎に寄せた手を止めた。数秒して、アマツカの発言の意味を理解し、「そうか、なるほど」と頷いた。
「区長はこのことは？」
「あの人はご存知です」
テンカワは知らないけど…、心でつぶやくアマツカの秘密。
「そうか、どおりで。最近テンカワ・ワタルに執着しなくなったわけだ。そういうことだったのか」
にやりと白衣の男が意味ありげに笑った。

「テンカワ」
トレーニングルームのテンカワへと、アマツカが声をかける。トレ

ーニングは終了し、室内にはテンカワしかいなかった。汗を拭うテンカワの表情は涼しく、いつもどおりクールな立ち姿だ。でもそれが彼女のすべてじゃない事を、誰よりアマツカは知っている。無理をしている、彼女は自分を想うがゆえに。
「調子は、どう？」
にこりと優しい笑顔で、アマツカはテンカワへと近づく。置いてある椅子へと座るように勧める。テンカワは椅子へと腰掛ける。対面するアマツカは膝をついて、彼女の鋼鉄の足へと目を落とす。
「大丈夫、問題ないわ」
抑揚のないしゃべり方だが、アマツカに心配させまいと気づかう感情がこもっていた。
「テンカワ、ムリしないで。…ボクの前ではウソをつかないで」
「ウソなんて…、ついてない」
「筋肉がこんなに緊張している。ずっと無理をして走り続けて、記録だってこの先も、落ちていく。もう限界なんだ、テンカワ。この鋼鉄の足は、装着者を傷つける」
「知ってる、でも、全然平気」
「テンカワ、もういいんだ。ボクが君を、この足から解放する」
「え？…待って、そんな私は」
「テンカワには内緒にしていたけど、…ボクにも症状がでたんだ。間違いないってあの人も言ってた」
テンカワの表情が凍りつく。アマツカの言葉の意味を理解したからだ。
「そんな…どうして…」
「だからもう、テンカワにこの足は必要ない。それにもう限界だし、テンカワはムリだって、伝えておくから」
笑顔で、アマツカはまたあの人のところに向かう。それもテンカワが恐れていた選択をするために。
「待って！　いかないで！　ツバサ兄さん」
去りゆくアマツカの袖口をテンカワが掴む。嘆きの混じる声色で、

引き止める。懐かしい呼び名で。だけど、彼の気持ちは止められない。自分では…
「ワガママ言うなんて、珍しいな。…じゃあね、ワタル」
優しい微笑で、掴んでいた手を振り解かれる。遠ざかる背中を、引き止めることができなかった。

その日の夜、モニタールームに白衣の男と、ギゾウがいた。
「でどうかね、あの足の性能はもっと高められるのかね？」
「現時点の足の性能に装着者のテンカワの体が追いついていません。さらに性能を上げる事は可能ですが、これ以上はあのこの負担になりましょう。このままではカモシカの二の舞になるのでは？」
「今すぐには、困るな。まだ準備もできとらんし。ああ、そうだドクター、手術の準備を頼んでおきたい」
「手術…、ああ、彼の…ですか？」
「ああそうだ。思いのほかテンカワが、持ちそうにないのでな。早いうちにすませておきたい」
にやり、とギゾウが不気味に笑う。
「アレが自分からぜひにと言ってきた。くくく、自己犠牲が趣味のような奴だからな。テンカワにしてもか？　あの二人、互いを想うがゆえにがんじがらめになっとる。だからこそ、ワシから離れられんのだよ」

「はぁ…」
今日のレースを終えて、あたしは控え室へと向かう。疲れた。今日はなんとか勝てたものの、なんかこうすっきりしない。やっぱり気になっているから。考えまいと言い聞かせても、どうしても…想わないなんてことはできない、アマツカ君のこと。
会場で、もしばったりと会ってしまったらどうしようとか心配して、でもし会ったら会ったで、こないだみたいに無視されたらまたショ

ックだし。だからと言って話しかけられたら、なんて答えたらいいんだろとか不安になったり。
テンカワさんも今日レースみたいだったけど、見てない。…見たくないというか。テンカワさんの傍にきっとアマツカ君がいるような気がして。…あの二人どういう関係なんだろう。特別な感じにも見えたけど。もしかして、恋人…とかそれに近い関係、とか。…テンカワさんが相手とか勝てる気がしない。一般的に見てもあっちのほうがずっとかわいいし、馬としても敵わないし。あ、そんな気がしてきた。テンカワさんのことなら好きでもおかしくない、むしろあたしのこと好きとか言うほうがおかしい。そうだよね、冷静に考えてみれば、アマツカ君レベルの美少年がどうしてあたしに惚れるんだよ？　少女漫画じゃあるまいし、そんな都合のいい展開、それこそ宝くじ一等に当選するようなもんだ。
『アイツは中央東の犬』
そんなことないと信じたいのに、それならすべて納得いってしまうなんて、気づきたくないのに、あああもうー、どうすれば…。
「カケリさん」
「あっ、えっ」
声をかけてきたのは、馬仲間のウミコさん。
「あ、ウミコさん、こんにちは」
「ええこんにちは、…勝ったのになんだか暗い顔してるのね。なにかあったの？」
うえっ、そんなに暗い顔していたのか？　あたし、情けない。
「ああその、別にたいしたことじゃないんですけど、まあちょっと、悩んでいるというか」
「そう、気持ちは体に直結しているから、あまり思い悩まないほうがいいわよ。…私でよければいつでも話聞いてあげるから、遠慮なく言ってちょうだいね」
うううう、ウミコさん優しいな。
「実は…好きな人がなに考えているのか、わかんないんです。…失

恋したようなものかな」
そういえば、ほんとあたしはアマツカ君のこと知らなさすぎる。
「そっか、カケリさん恋しているのね。私はそういうのとんと縁が無いから、ちゃんとしたアドバイスとかしてあげられそうにないけど」
「いえいえ、あたしも今までまともに恋愛とかしたことないし、初心者ですよ！　しかも一方的に片想いだし、妄想して浮かれてるようなレベルなんですよ」
「へぇ…、カケリさん見た感じ元気な感じなのに、恋には臆病になっちゃうのね」
「まあ自信なんてないですから。元々馬としても自信なんてなくて、成り行きのまま走ってるようなもんです」
「そうなんだ、あまりそんな風には感じなかったわ。あの区長さんと一緒だったからかしら？」
まあマケンドーのせいであたしは馬になったわけだし。
「馬として走っていくためには、区長との信頼関係は大事だと思うわ。信じていなければ、自分の走りができないものね。私は私で、リンドウを信頼しているわ。彼のしたことや考えを許せないと思うことも多々あるけれど、私を認めてくれて、私にチャンスを与えてくれた人でもある。すべてを受け入れられるほど私は強くはないけれど、信じる気持ちだけは持ち続けていたい」
ウミコさん…。
「あなたのとこの区長、いい区長ね。私もお世話になったし、ちゃんとお礼が言いたいと思っていたの、あとで会わせてくれないかしら？」
「？　あ、もしかして、あの雑誌のこと？」
ウミコさんのことを記事にして中傷していた、ゴシップ雑誌。マケンドーがかけあって、後日謝罪文が載せられたんだっけ。
マケンドー、普段は嫌な奴だけど、ウミコさんのこと助けてくれたんだよね。

「ええ、なかなか伝える機会がなかったのだけど、あまり後になってしまうのもよくないし」

レースを終えた後、トイレに篭り、一人ずっと思い悩んでいたテンカワ。

「（どうすればいいの？　このままじゃ…アマツカが…）」

辛うじて今日のレースは勝てたが、体の疲労は彼女が自覚していた以上にあった。頭の中はアマツカのことでいっぱいで、自分のことを考える余裕なんてなかった。どこを見ているかわからない目で、トイレを出てひやりとする通路を歩いていた。ふいに視界がぶれて、体が傾く。

「危ないっ、大丈夫ですか？」

転倒を免れたのは、通りすがりの青年に支えられたおかげだ。一瞬気を失いかけていた。

「あ、…平気、少し足がもつれただけ」

自分の足でない鋼鉄の足で、立ち上がる。

「お大事になさってください」

「（…この人は、たしか）」

青年の顔に、テンカワは覚えがあった。知り合いではないが、この会場で何度か遠目に見たことがある。若草区長の秘書の男だ。

「待って！」

とっさに、男の袖口を掴んで引き止める。

「お願いがあるの。あなたの区長に、頼みたい事が」

「え？」

あたしはウミコさんと一緒にマケンドーのもとへ向かった。駐車場へ続く地下通路で立ち話だ。

幸いにも、アマツカ君らしき姿は見当たらなかった。カツさんは、

一緒にいなかった。
「区長お久しぶりです、緑丘のササオです。某特社の件ありがとうございました」
「いや、礼を言われるような事はしていない」
あれ？　マケンドー「そうだもっと俺に感謝しろ」みたいな態度とるかと思ったら、全然そんなことなくて、むしろなんか困ったように見える顔でそう答えた。
「そんなことありません。一度出てしまった記事はなかったことにはできないけれど、でも謝罪文が出たことでだいぶ気持ちも救われたんです。本当に感謝しています」
「いい、よしてくれ。もうその件は忘れたほうがいい。互いにな」
「へ？」
「いくぞカケリ」と言ってマケンドーはウミコさんに背を向けて歩き出す。ウミコさんきょとんとしているし、「じゃあまた」とあたしはウミコさんに手を振って、マケンドーを追いかけた。
マケンドー、ウミコさんにお礼言われて照れているのかと思えば、そんな感じでもなくて。
「ちょっと、ウミコさんのお礼素直に受けたらいいんじゃない？」
「礼を言われるのは筋違いだ」
「どういうこと？」
「某特社を動かしたのは、俺の力じゃない。カクバヤシの名前の権力だ。俺はカクバヤシの名でもって連中を動かした。だから、礼を言われる筋合いはない」
そういうマケンドーの顔は悔しそうな、切なそうな表情で、こんな顔したマケンドーは始めて見る。
「でも、それもマケンドーが行動したからでしょ？　だから、それはやっぱりマケンドーの力だよ、あたしも、きっとウミコさんだってそう思ってる」
結果動かしたのがカクバヤシ家の力でも、行動したのはマケンドーだから。

「その…あたしからも、ありがとう。ウミコさんは恩人だし、力になってあげたかったんだ」
「だから、礼を言われるのは筋違いだと言っただろう」
「ちょっ、さっきの話聞いてた？というか伝わってなかった？」
いい事、というか恥ずかしいこと言った気がするけど、スルーされると余計にこっちが恥ずかしくなるよ。
なにこのツン男、というかひねくれ者！
「いや、伝わっている。…不思議なものだな、俺を勇気づけるのはいつもお前なんだな」
ふっと瞬間マケンドーが穏やかに微笑んだものだから、びっくりして「うぇっ」て変な声出しちゃった。なに今のセリフすごく意味深のような？
「な、なにそれ？　どういうこと？」
「なんでもない、行くぞ」
いつもの調子に戻って、歩き出すマケンドー。だから、スルーするなっつーの。
「ちょっと、行くぞって、だいたい車のキー持ってるのカツさんでしょ！」

「へ～、いろいろとおもしろくなってきそう。そろそろ見てるだけもあきてきたなー。どうしよっかー」
カケリとマケンドーを離れた位置で眺めながら、にやりと笑う怪しい影があった。人知れず影の中にその姿を消す。

「…私、頼ってしまった…」
若草区長の秘書の男に、テンカワは救いを求めてしまった。若草はギゾウがもっとも敵視している相手だ。敵だ。それなのに、いや、…だからこそかもしれない。
孤独なテンカワには他に味方がいなかった。かつてはいた、テンカ

ワの家に入って、血が繋がらなくとも実子のように愛してくれたテンカワ夫妻、そして施設からの付き合いもあり兄妹になった兄のツバサ。三人を不幸な事故で失ってから天涯孤独となり、ギゾウの元に引き取られた。その後、死んだと思っていたツバサが目の前に現れ、かつての名を捨て「アマツカ」として蘇った。だから、テンカワの唯一の味方はアマツカだけだった。が、そのアマツカがあの選択をしてしまえば、自分の力だけでは止められない、彼を救えない。ずっと一人で思い悩んで、テンカワがすがったのは、敵である若草のマケンドーだった。彼が助けてくれる保証なんてどこにもない。それでも……。

座り込んで、膝を抱え、冷たい足を見下ろす。

この足でアマツカを守ると誓ったのに、無力な自分が虚しく悔しい。

テンカワの頬を静かに雫が伝い、落ちていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4327z/

馬　駆ける

2011年12月21日21時46分発行